暁の大地 3

成尾　陽

目　次

六、信仰と生活◆7
「ありがたい」と思う心◇7
真の幸福◇18
神さまのご守護◇27
春の訪れ◇36
みろくの大神さまのご因縁◇46
みろく能◇56
王仁三郎と鬼三郎◇66
神　命◇75
覚　悟◇83
ギャラリーおほもとと神教殿◇91
お玉串袋◇101

玉串とは◇110
直　会◇119
年祭と奥都城◇128
お墓参り◇137
夫婦の縁◇146
不思議な出会い◇155
身魂の夫婦◇165
決　意◇175
取り込み詐欺◇185
尊い祈り◇194

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年から二十七年までの機関誌「おほもと」と、平成二十八年以降の「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地 3

六、信仰と生活

「ありがたい」と思う心

「恵子さん、今何時？」
恵子はバッグから携帯電話を取りだして、時間を確認した。
「五時ちょっと前ですね」
「おや、もうそんな時間になってたんだね。高村先生、遅くまですみません」
「いえ、かまいませんよ」
高村が言った。
「いろいろと勉強になりました。ありがとうございました」
大地はそう言いながら、資料を高村に返そうとした。
「よかったら差し上げるよ」
「えっ、いいんですか。ありがとうございます」
「またゆっくり読んで勉強しておいて」

「はい、また読ませていただきます」
大地は頭を下げて、資料を自分のバッグにしまった。
「では先生、これで失礼します」
音江が挨拶すると、恵子と大地も頭を下げ、四人はいっしょにソファから立ち上がり、玄関に向かった。
「先生はこれからどうなさるんですか？」歩きながら恵子が高村に訊いた。
「せっかくなので、ここの温泉に入ってから、主会長のお宅に向かいます」
「そうですか。じゃあ、先生ここで」
「いえ、お見送りしますよ」
「あらぁ、ありがたいねえ」
音江がまた頭を下げた。

地面がさっき降った夕立で湿っている。
「もう少ししっかり降ってくれたら涼しくなったのにね。かえって蒸し暑くなったみたい」
「そんな感じですね」

恵子の言葉に、大地が反応した。
「大地君、おかあさんによろしくね」
「はい、ありがとうございます」
「じゃ、大地君、またどこかで会いましょう。できれば、亀岡の聖地でね」
高村が聖地参拝を誘うように言った。
「そうですね。機会があれば…」
大地が返答した。
「町村さんお気を付けて。お元気でね」
「はい、ありがとうございます」
駐車場で、互いに挨拶し、音江と恵子、大地はそれぞれの車に乗り、高村の見送りを受けて、松代荘を後にした。

「ただいま」
自宅に着いた大地は、明るい声でリビングのドアを開けた。
「おかえりなさい。さっき恵子さんから電話があったのよ。高村先生とお話ししてたんだってぇ。良かったね」

台所に立っていた京子が、そう言いながら振り向いた。
「なんだ、情報が早いなあ」
「そうよ、恵子さんだもの。で、どうだった？」
「うん、いろいろ勉強になったよ。以前、綾部のおじいちゃんから聞いてたことがあったおかげで、分かりやすかったよ」
「そう、良かったわね。もう少ししたらおとうさんも帰ってくると思うから、夕食にしようね」
「おとうさん、今日も仕事？」
「今日はね、高井さんとこの友ちゃんの結婚式で、披露宴に行ってるのよ」
「あ〜、おとうさんの同級生の高井さん？」
「そう、おとうさんととっても仲良しで、長女の友ちゃんも赤ちゃんのときからよく知っているでしょ。だから友ちゃんから、ぜひ披露宴に出席してほしいって頼まれたみたいよ」
「へえ〜、そうなんだ」
「なんだか、自分の娘を嫁にやるみたいだ、って言ってたのよ」
「〝わが家のお嬢さん〟は、当分結婚しそうにないしね」

「そうね」
妹のちあきはこの春、美容の専門学校を卒業して、東京・表参道にある美容院に就職した。駆け出しの美容師で、将来はスタイリストを目指している。
「かなり忙しいみたいで、夏休みも帰ってくるかどうか…」
京子が言った。
「やりたいことをやれてるんだからいいんじゃないの」
「元気で仕事ができてたら、それでいいけどね」

「司は？」
大地が訊いた。
弟の司は、春から大学の一回生。自宅から松本市内のキャンパスまで通っている。
「夏休みだから、遊びに行ってるのか、サークルかなあ？　友達もできたみたいだし」
「女の子かな？」
「さあねぇ？」
京子が笑顔で話を続けた。
「大学に入った時は、〝友達ができない〟って悩んでたけど、二月（ふたつき）もしたら、泊まれる

ところもいくつかできたみたいで、しょっちゅう帰ってこないことがあるでしょ」
「そうそう、三カ所ぐらいは〝ねぐら〟があるって言ってたよ。大学生活をエンジョイしてるからいいんじゃないの。僕もそうだったけど、司は今、楽しい時だよ」
「そうみたいね。ちゃんと勉強もしてもらわないと困るけどね」
「まあ、大丈夫でしょ」
大地は軽い口調で言った。

「あれ、こんなのあったっけ？」
「ん、何？」
「ここに置いてあるカレンダーみたいなの」
「あ〜、それね。昨日綾部のおばあちゃんが送ってくれた荷物の中に入ってたのよ。『ころの鏡』っていう大本の日めくりカレンダーよ。いいでしょ、それ」
京子はそう言いながら、大地の方へ歩み寄ってきた。
「いやいや、今初めて見たから…」
大地は、……そんなにすぐわかるわけないだろう…と思いながら言った。
「教主さまのご就任十周年の記念品だって書いてあったけど、二つあったからって、

一つを野菜といっしょに送ってくれたのよ。いいこと書いてあるのよねぇ」
大地も近づいて見た。

今日は七月一日。〝1日〟の文字の下に、耀盌の水指の写真があって、横に〝出口王仁三郎聖師さま作　水指「如衣」〟とあり、右に出口日出麿尊師さま『信仰覚書』第五巻の一節が記されている。

どんな場合でも
「ありがたい」と思う心
これは神に近づく
第一歩である

「このお示し、心に染みない？」
「ん～、なるほどねぇ。簡単な言葉だけど、奥が深い感じだよね」
「わかる？」
「いやぁ……。でも、信心深い人っていうのは、こういうことなんだろうね。町村の

おばあちゃんがそうじゃない？」
　大地が音江のことを思い出して言った。
「そうね。町村さんは、〝ありがたいねえ〟っていう言葉を、いつも自然と口にしているものね」
　京子が頷きながら言った。
「営業でお客さんのところを回ってると、いろんな人と会うんだけど、いつも苦情のように小言や文句ばっかり言ってる人もいてね。そんな人と話をしていると、ものすごく疲れるんだよね」
「そういう人は、眉間にシワを寄せてて、いつも難しい顔してない？」
「そうなんだよねぇ」
　大地は相づちを打ちながら言った。
「そうかと思うと、いつもニコニコして、やさしい言葉をかけてくれる人もあるんだ。そんな人と話をしていると、何だかホッとするんだよね」
「大地もいい勉強してるんだね」
「まあ、一応社会人ですからね」
　笑顔でそう言った後、大地は腕組みしながら『こころの鏡』を見て、少し考えた後

に言葉を続けた。

「おかあさん、このお示しは、一行目がポイントだよね」

「えっ、一行目？」

京子は大地の言葉を聞き返し、『こころの鏡』に目をやった。

「だって、誰が見てもありがたい場面や状況なら、普段小言ばっかり言っているような人は別としても、普通の人だったら〝ありがたいなあ〟って思えるでしょ。でも、〝どんな場合でも〟っていうことは、ものすごくつらく苦しい時にでも、っていうことでしょ」

「そうねぇ」

「死にそうに苦しいときにでも、〝ありがたい〟と思えるということは、なかなかできないよ。おかあさん、できる？　少なくとも今の僕には無理だよ」

……私だってそうかもしれない。

京子は無言で頷いた。

「だから、どんな場合でも〝ありがたい〟と思う心を持てるということは、たいへんなことだよなあ」

大地は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。
「ホントね。このお示しを実践しようと思うと、よっぽど覚悟を決めないといけないのかもしれないね。というより…、頭で考えている間はダメなのかもね。そんなことは意識しなくて、自然と〝ありがたいなあ〟って思えるようにならないといけないんだろうね」
「そういうことだよね」
大地が神妙に言った。

「ただいま！」
玄関で声がした。
「おとうさん、帰ってきたね」
「そうね。さあ、夕飯の支度、支度…。ありがたいねえ！」
「おかあさんの〝ありがたい〟は、なんかわざとらしいなあ」
大地が笑いながら言った。
「そうぉ」
……大地も成長したわね。

京子は大地から大切なことを教えられたような気がして、少し嬉(うれ)しくなり、笑みがこぼれていた。

真の幸福

「大地も帰っていたのか」

引き出物の大きな紙袋を提げて大地の父・剛（たけし）がリビングに入ってきた。ほろ酔い気分のようで赤ら顔である。

「おかえりなさい。僕は一時間くらい前かなあ」

大地が答えた。

「おかえりなさい、どうだった披露宴？」

そう言いながら、京子が台所からリビングに入ってきた。剛は、紙袋を京子に手渡した。

「ああ、いい披露宴だったよ。友ちゃんも見違えたなあ」

「友美ちゃんはもともときれいじゃない」

「そうなんだけど、やっぱり花嫁となると違うなあ。一段とべっぴんさんになっていたよ」

「高井さんも良かったわねえ」

「そう、〝花嫁の父〟はもうデレデレで、最後の花嫁からの手紙の時には、もう涙、涙

だったよ。友ちゃんも本当に幸せそうだったなあ」
「ちあきが結婚するときには、お父さんもそうなるんじゃない？」
京子が茶化すように言った。
「いや、俺は大丈夫だよ」
「わからないわよ～」
「お父さん、意外と号泣しちゃったりしてね」
大地も笑いながら言った。

「友美ちゃんは大地と同じ歳だったよなあ」
剛が訊いた。
「そう確か同級生だったよ」
大地が答えた。
「お相手はおいくつなの？」
「確か三つ上って言ってたから、二十七歳だな。仲田義信君って言って、なかなかの好青年だったよ。とてもお似合いのカップルだと思ったなあ」
「そうなんだ。で、二人のなれ初めは？」

「おう、それそれ」
「何、どうなの？」
「いやあ～、なかなか面白い出会いだったんだね、これが」
「え、訊かせてよ」
大地が身を乗り出した。京子も興味深げな表情になった。

「それがなあ、タクシーの運ちゃんが〝恋のキューピット〟って話なんだよ」
そう言いながら、剛は大地の正面に腰を下ろした。
「へえ～、面白そう」
「あっ、母さん、水一杯もらえるかなあ」
剛は、ネクタイをゆるめた。
「はい、どうぞ」
京子は、剛の前に水の入ったコップを置いて、隣に腰掛けた。剛は半分くらい水を飲むと、話を続けた。

「友ちゃんは大学を出てから、市内の結婚式場に就職して、ウエディングプランナー

の仕事をしているんだ。そこでは毎朝、職員が職場の掃除をするんだけど、友ちゃんは、よく玄関の外の溝も掃除していたそうだ」

「溝を？」

「そう、溝を。なぜか溝が汚れているのが気になるみたいで、時には溝にはめてある金網をはずして、たまった汚い泥をすくい上げたりしていたらしいね」

「あら、感心ね」

「でも彼女は、それをお客さんや人に見られたくなくって、朝少し早い時間とかにしてたそうだ」

「まあ、偉いわねえ」

「で、その近くにタクシー乗り場があってね。一人のタクシー運転手さんが、友ちゃんが溝掃除している姿をよく見ていたんだね。それに友ちゃんは、通勤でタクシー乗り場の横を通るとき、そこにいるタクシーの運転手さんたちに声をかけたり、毎朝きちんと〝おはようございます〟って、挨拶（あいさつ）していたんだそうだ」

「へえ～、またまた感心だね」

「だろう、たいしたもんだよ」

「ある日、一人の運転手さんが近づいてきて言ったそうだ」

「おねえちゃん、偉いねえ、よく汚い溝掃除をやってるよね」って。
すると友ちゃんが、
「いえ、気になるから、ちょっと掃除してるだけです」
って答えると、運転手さんが訊いてきたそうだ。
「おねえちゃんは、毎朝きちんと挨拶してくれるし、〝おっちゃん元気？〟とか気さくに声を掛けてくれるじゃないか。あんたみたいな子は、きっといい彼氏がいるんだろうなあ？」
ところが友ちゃんは、ちょうどその少し前に、それまでつき合っていた人と別れたところだったんで、少々意気消沈していたんだね。それで、
「いえ、彼氏はいませんよ」
って答えたんだと。そしたら運転手さんが、
「それだったら、あんたに会わせてあげたい青年がいるんだけど。どうだい、一度会ってみないかい？」
と誘ってきたそうだ。
友ちゃんは最初気乗りがしなかったんだけど、運転手のおっちゃんがあんまり積極

的に薦めるし、〝どうでもいいや〟って、半ばやけ気味で、「じゃあ、会うだけ会ってみます」と、誘いを受けたそうなんだ。

で、その相手の青年というのは、タクシー乗り場の近くのビルに出入りしているエンジニアの子で、その彼も毎朝、タクシーの運転手さんたちにちゃんと挨拶していく青年だったそうだよ。その運ちゃんは、

〝私らが立ち話していても、誰もがその横を素通りしていくのに、二人だけはきちんと挨拶をしてくれる。この二人ならきっと相性がいいんじゃないか〟

と思ったそうだよ。

それで、運ちゃんに言われた日時に、タクシー乗り場で三人が落ち合ったんだ。そこでお互いを紹介され、それからタクシーに乗せられて、運ちゃんが薦めるレストランまで送ってもらい、初めてのデートをしたということなんだよ。

そしたら二人気が合ったらしいね。連絡先を交換し、一年間お付き合いをして、結婚することになった……というなれ初めなんだよ。

「へえ〜、面白い出会いだね。そんなことがあるんだね」

大地が感心して言った。

「その運転手さんは、〝あいさつ〟を通して、二人の心根に共通するものを感じたのよね」
京子が言った。
「そういうことだな」
「ということは、その運転手さんが実質的な仲人さんみたいなものよね」
「そうなんだよ。だから、披露宴にはその運ちゃんも招待されて出席してたんだよ」
「いい話だね」

「まあ、オチもあるけどね」
「え、なに？」
大地が興味を示した。
「運転手さん、友ちゃんたちがうまくいったものだから、恋のキューピットとして自分にその才があると勘違いしたのか、調子に乗ってその後も何組かくっつけようとしたらしいんだけど、ことごとくダメだったらしいよ」
剛が笑いながら続けた。
「まあ、でも二人にとっては恩人だからね。運ちゃんもとっても嬉しそうだったなあ」
「そんな二人なら、きっと幸せな家庭を築いていくんでしょうね」

京子が笑顔で言いながら立って、台所へ進んだ。
「まあ、間違いないだろうね」
剛はそう言って残ったコップの水を飲み干した。
「お父さん、着替えてきたら」
台所から京子が声を掛けた。
「そうだな。あ、大地、この引き出物開けてみてくれるか？」
「了解です」
大地が言った。
剛はイスから立ち上がり、二階の自室へ向かった。大地は手提げ袋から引き出物を取り出し、包みを開けた。新しい人生をスタートさせた二人の〝しあわせ〟が伝わってくるようであった。

翌朝、大地は朝食のテーブルに着いた。ふとテレビの横の、大本み教えカレンダー『こころの鏡』が目に入った。一枚めくられ、〝2日〟になっていた。
二代教主さまの『をぎまつ』の書画の横に尊師さまのお示しがかかれていた。

真の幸福は、お互いが
親切にし合うところにある

大地は、前日の新郎新婦のなれ初めの話を思い返した。
……〝真の幸福〟かあ。友美ちゃん夫妻は、きっとなれるんだろうなあ。

神さまのご守護

「おはよう」

起きがけの大地は、手ぐしでボサボサの髪をかき上げながら、リビングに入ってきた。

「あら、おはよう」

台所から京子の声がした。

「大地、テーブルの上に人型が置いてあるでしょ。いつものように、住所と自分の名前と年齢を書いておいてね」

「ん〜、あ、これね。わかった」

大地が地元での職に就いて二年半が過ぎた。平成二十五年が明け、一月も後半になっていた。

「そうか、もうすぐ節分だね。前に綾部に行って、おじいちゃんと節分大祭にお参りしたのは…、学生の時だから…、もう三年前になるかなあ〜。早いなあ〜」

大地が当時をなつかしむように言った。

「もう三年たつんだね。あのころ大地は就活でちょっと落ち込んでたもんね」

京子が大地に近寄りながら、ちゃかすように言った。

「やめてよ。あの当時は真剣だったんだからね」
「そうだったね。だから見かねて、お母さんが綾部のおじいちゃんのところに行くようにすすめたのよ」
「そうでした。どーも、ありがとうございました」
大地は、テキトーな口調で言った。
「今年、またお参りに行ってきたら？」
「いや…、今は…、まあ、そんなに悩み事ないから…」
大地は歯切れ悪く言った。
「あら、悩み事がなくったってお参りはできるのよ」
「そりゃあそうだけど…ねぇ」
「ちょうど今年は二月三日が日曜日だしね」
「そうなの？　でも、節分大祭は四日の朝まであるから、月曜日になっちゃうじゃない？」
「一日会社を休んだらいいだけじゃない」
「もう、お母さんは簡単に言うけど、そう休めないよ」
「あらそう。でも、友達と遊びに行くときには有給をとってたじゃない」

「えぇ〜、あ〜、それはまあ、友達は大切にしないといけないからね」
「あら、そうでございますか？」
京子が嫌みっぽく言った。

「で、これに書けばいいんだね」
大地が話を変えた。
「そう、こっちの型代の方にも、大地の車と自転車を書いておいてね」
そう言いながら、京子は台所へ入った。大地はそばにあったボールペンを手にとったが、まだ顔を洗っていないことを思い出した。
「おっ、いけねぇ」
ボールペンを置き、洗面所に向かった。しばらくして洗面をすませ、リビングに戻ってきた大地は、椅子に掛けて人型と型代に必要事項を記入した。
「お母さん、これに息を吹きかけて体をなでたらいいんだったよね」
リビングに入ってきた京子に訊(たず)ねた。
「そうよ、特に頭をよくなでた方がいいかもね」
京子が冗談口調で言った。

「了解です」
大地も笑いながら答えて、人型に息をかけ、全身をなでた。終わると顔の前で軽く押し頂く格好をして、型代といっしょにした。
「これ、どうする」
「綾部のおじいちゃんに送らないといけないんでね。あっ、でも大地が持っていってくれるなら別だけどなあ～」
そう言いながら、京子が大地から人型・型代用紙を受け取った。

「だからぁ…、ねぇ…。あ、そうそう、前から気になっていたんだけど、その人型の紙の真ん中に書いてある象形文字みたいなのは、何かのマーク？」
大地が人型用紙に目線を向けた。京子も手にした用紙に目を落とした。
「あぁ、これね。確か…、お祓(はら)いをするという〝修祓(しゅうばつ)〟の二文字よ。修学旅行の〝修〟という字と、祓うの〝祓〟という字が縦につなげて書いてあるのよ」
京子は用紙を大地の目の前に差し出した。大地は用紙に顔を近づけ、じっと見て、
「なるほど、〝修祓〟という字かあ。そう言われたらそう見えるね。お母さん、すごい！よく知ってたね」

「でしょ。……実は、だいぶ前に、私もおじいちゃんに質問したことがあってね。その時に聞いたのよ」
「だろうなあ」
二人は顔を見合わせて笑った。
「でもお母さん、この人型って効くの？」
この質問に、京子は少し真顔になって大地を見つめ、口調を変えた。
「大地、〝効く〟とかいうもんじゃないのよ。人型は、一年の間に、知らず知らずに犯した罪・穢(けが)れをはらっていただいて、神さまのご守護をいただく、とっても大切なものなのよ」
京子は諭すように言った。
「あ、ごめんなさい、そんなつもりじゃなかったんだけど…」
「ん、わかっていればよろしい」
京子はまた笑顔になった。
「ところで、どんなご守護があるんだろうね」

大地があらためて訊いた。
「そりゃぁ、人型のおかげ話はたくさんあるわよ」
「どんな？」
「そうね、印象に残っているのはね…」
そう言いながら京子は少し考えて言葉を続けた。
「何年か前の『おほもと』誌に載っていた
おかげ話はすごいなあ、って思ったなぁ」
「へ〜、どんな？」
「確か島根県の隠岐島に住んでる八十過ぎの漁師のおじいさんの話でね。その人は大本の信者さんではないんだけど、毎年人型を受けておられたのね。それで〝型代の祓いの証〟を、自分の船や車につけていたのよ。ある日そのおじいちゃんが漁に出たっきり帰ってこなかったそうよ。無線の応答もなくって安否不明になったわけ。家族や漁師仲間もとっても心配して、必死で捜索したけど、見つからなかったの」
「ほう」
「三日たって、その日も夕方になり捜索が中断することになって、おじいさんと一番仲の良かった漁師さんも、やむなく港に帰るために船を旋回させていたの。そしたら、

白地に赤い丸印、まるで日の丸の旗を小さくしたような紙片が海面に浮いているのが目に留まったの。その漁師さんは直感的に〝じいさんの舵(かじ)に結んであったものだ〟と思って、網ですくいあげたら、『大本節分大祓祈願』って書かれた〝祓いの証〟だったのよ」

「あ、あの車に下げているお札だね」

「そうなの。で、その漁師さんは、〝じいさんは生きている！〟と捜索していた全部の船に連絡をいれて、風向きと潮の流れから、お札が流された地点を目指して捜索が再開されたのよ」

「それで？」

「そうしたら、しばらくして竹島の近くを漂流している釣船を発見。大声で呼びかけると、おじいさんの元気な声が返ってきて、みんな大喜びをした…、っていう話なのよ」

「へぇ～、助かってよかったね。しかし、まあ、よく漂流している場所がわかったもんだね？」

「それがね、〝祓いの証〟が流れていたのは、偶然ではなかったのよ」

「えっ、どういうこと？」

「実は、遭難したこのおじいさん、その半月前にも自動車事故を起こして、その時に

も大きなおかげをいただいていたのよ」
「そうなの？」
「車で山にタケノコ掘りに行く途中、運転を誤って崖下へ転落してしまったんだって」
「へぇ～」
「気がついてあたりを見まわしたら、押しつぶされたドアに少しすき間があったんで、そこから這い出したそうよ。幸い、顔と手足に軽いすりキズだけで、九死に一生を得たわけよ」
「よかったなあ」
「で、レッカーで車を引き揚げたところ、車内に結びつけていた型代のお札がなくなっていたそうで、おじいさんは〝お札が身代わりに谷底へ落ちてくれた〟って思ったそうよ。この事故の体験があったから、海でエンジンと無線機が故障して遭難した時、潮の流れが港の方に流れているからって、罰当たりかもしれないけど、型代の祓いの証をはずして、『ゴメン、ゴメン』って言いながら、海に流したんだって。で、それを仲のいい仲間が見つけてくれて無事に救助された…、っていうわけ。どう、すごい話でしょ！」
「すごいね。そのおじいさんは、二度も神さまに助けてもらったんだね」

大地は、感心した表情で言った。

「ところで大地…」

京子が言った。

「会社、時間大丈夫なの？」

「うわぁ、まずい！　もう、お母さんのせいだよ」

「えっ、私…。何言ってんのよ。早くしなさい！」

大地は二階へ駆け上がった。京子は大地が書いた人型を見て、ニコリと笑った。

春の訪れ

会社への道すがら、車を運転しながら車内に下げている型代の「祓(はら)いの証」が目に入った。大地は家を出る前に、京子から綾部での節分大祭参拝を勧められたことを、ふと思い出していた。

……母さんには「悩み事がない」と言ったものの、実はあるんだよなあ。

京子に言ったことは本心ではなかった。大地は、今の仕事を続けるべきか迷っていた。以前にも悩んだことだったが、一度それを打ち消して仕事に取り組んできた。

……自分は営業に向いていないのでは？

半年前にも考えたことだった。営業先でお客さんと商談することは楽しかったが、商品を奨(すす)める段になって、相手が望んでいる商品に関し、自社より他社の方に良い商品があることを知っていると、つい相手の立場に立ってしまい、他社製品を奨めてしまう自分がいたのだ。

……お客さんのためにはなるけど、やっぱ、これじゃあ、会社のためにはならないよなあ。

そんな大地の心情が顔に表れているのを京子が知ってか、ちょうど松代荘で開催さ

れた「生きがい講座」を勧められたのが去年の夏のことだった。その時、高村特派から講座後にいろいろと話を聞き、何となく心が落ち着き、以来、気持ちを切り替えて仕事に打ち込んできた。

……でもやっぱり吹っ切れないなあ。

心のどこかに、「このままじゃいけない」という自分がいた。

四月下旬、信州も春の訪れを感じる季節になっていた。大地はお得意さんまわりが終わった午後、千曲川沿いを営業車で走っていた。小布施橋を渡りながら、河川敷に目をやるとピンクや白の花が目に入った。

……ちょっと休憩するかあ。

大地は橋を渡りきってから車を停め、おだやかな陽気に誘われるように、河川敷に下りていった。そこには桜と花桃が今を盛りと咲き誇っていた。若葉の木々の間からは、向こうに菜の花畑、遠くには、残雪をいだいた黒姫山と妙高山が見える。まさに春爛漫。近くには、散歩する何組かの母子の姿もあった。大地は手を広げて背伸びをし、大きく深呼吸した。

……あー、気持ちいいなあ。

大地は、花桃の下を歩きながら、漂ってくるほのかな香りを楽しんでいた。しばらく歩いてベンチに腰をおろした。ポケットには、さっきお得意さんからもらった缶コーヒーが入っていた。

……ちょっとぬるくなったけど。

そう思いながら、プルタブを開け、コーヒーを飲んだ。ほっこりとした気持ちになった。

少ししてスマートフォンが鳴った。見ると、京子からのメールだった。

〝今日は何時に帰る？〟

相変わらず、用件のみのメールであった。

〝仕事も早く終わりそうだから、六時前には帰るよ〟

大地も短くメールを返した。京子からすぐに返信が来た。

〝了解！　待ってます！〟

……えっ、待ってますって、何かあったっけ？

そう思いながらも、帰ればわかることだと思い直し、残ったコーヒーを飲み干してから腰を上げた。

その十分ほど前、大地の自宅に一本の電話が入った。京子が受話器をとった。
「はい、もしもし、雨宮でございます」
「あ、もしもし京子さん、町村です」
「あら、恵子さん。どうしたの？」
「今、大丈夫？」
「ええ、大丈夫よ」
「実はね、今うちに、大本の特派の高村先生がお越しでね。おばあちゃんと三人で話してたら、大地君の話になったのよ。ほら、去年の夏、松代荘で会ったでしょ」
「そう、高村先生が来ておられるの？　その節は大地がお世話になったものね」
「でね、今夜、高村先生はうちに泊まられるんだけど、夕方時間があるそうなので、よかったら大地君に会いたいとおっしゃっているのよ。どうかしら？」
「あらぁ、それはありがたいわね。で、どうしたらいいの？」
「先生が京子さんのお宅にうかがいたいっていうことなんだけど」
「そうなの。じゃあ、一度大地の都合を訊いてみて、またお返事しますね」
京子は、受話器を置くと、すぐに大地にメールした。

……よしよし、六時前に帰ってくるなら大丈夫。
京子は大地からの返信メールを見ながら、早速、恵子に電話を入れた。
「よかった、じゃあ、高村先生に伝えるね」
「はい、よろしくお願いします」
「京子さん、先生はうちへ帰られてからいっしょに夕食していただくんで、ご心配なくね。そんなに長居はされないと思うんで」
「そうなの、わかったわ。ありがとうございます。じゃあ、お待ちしてます」

午後五時半、玄関のチャイムがなった。京子が出ると高村特派が笑顔で立っていた。
「高村です。今日は突然にすみません」
「いいえ、ようこそお越しくださいました。大地も喜ぶと思います。さあ、どうぞお上がりください」
「はい、お邪魔します」
「先生、うちにはまだご神前がないので、すみません」
「はい、承知しています」

「いずれはと思っていますので」
「そうですね。楽しみにしています」
「そのためにも、大地にしっかりお話をしてやってください」
「いや〜、今日は大地君と雑談をしに来ただけなので…」
「先生、それがありがたいんですよ」
「そうですか」
高村はリビングに案内され、テーブルについた。

しばらくして大地の車がガレージに入った。
……あれ、お客さんかな。ん？　京都ナンバー？　誰だろう？
「ただいま」
「おかえりなさい。大地、お客さんよ」
「え、誰？　僕に？」
「まあ、入って」
大地は恐る恐るリビングのドアを開けた。
「お邪魔してます」

「あー、高村先生」
大地は驚いた声で言った。
「お久しぶり」
「ご無沙汰しています。その節にはいろいろとありがとうございました」
「あれから、もう八カ月くらいたつね。元気だった？」
「はい、おかげさまで。先生は？」
「はい、この通り元気です」
ひとしきり挨拶が終わると、大地は部屋に鞄を置き、手を洗ってからリビングの席についた。
それからしばらく、お茶を飲みながら、何くれと無く話がはずんだ。
「ところで大地君、仕事は楽しいかい？」
「はい、楽しいんですが、ただ…」
「ただ、どうしたの？」
大地は、少し間を置いてから話し出した。「実は、今の仕事をずっと続けるかどうか、迷っているんです」

「そうなの？」
大地は高村に、今の心情を隠さず話した。高村もそれを親身になってじっくりと聞いた。

「どうだろ大地君、気分を変えて、自分の心を見つめ直すためにも、一度聖地へお参りしてきたら。綾部には梅木さんもおられるし、ちょうど、もうすぐ〝みろく大祭〟もあるからね」
「みろく大祭？」
「そう、五月五日のみろく大祭」
「ゴールデンウイークですね」
「大本の四大大祭の一つなんだよ」
「じゃあ、節分大祭もその一つなんですね」
「二月三日の節分に行われるのが、大本で一番大切な祭典である〝節分大祭〟だね。あと、春・夏・秋と、それぞれに大祭があるんだよ。五月が〝みろく大祭〟、八月が〝瑞生大祭〟、十一月が〝大本開祖大祭〟。その中で瑞生大祭だけが亀岡であって、あとの三大祭は、綾部で行われるんだよ」

「節分大祭は一度お参りしたのでわかるんですが、〝みろく大祭〟ってどんなお祭りなんですか？」
大地が興味深げに訊いた。

「大地君は、天の神さまと地の神さまのことはわかるかなあ？」
「前に綾部のおじいちゃんから教えてもらったので、何となくわかりますが…。確か遠い昔に、大地の神さまである国祖がご隠退されるときに、天上の神さまと神約を結ばれたんですよね。で、国祖が再びこの世に現れられた時に、天の神さまが天上の世界から地上に降りて国祖を輔（たす）けられるということじゃなかったですか？」
「そう、すごいね。よく知っているね大地君！」
「いやあ、うろおぼえです」
「その天の神さまのことをみろくの大神さまとも言うんだよ。そして、聖師さまの肉体を借りて降りてこられ、神さまのお仕事である〝みろくの世〟を創（つく）るというご神業に、いよいよ本格的にとりかかられるという節目の日をお祝いして始められたお祭りが、〝みろく大祭〟なんだよ」
「いつ始まったんですか？」

「聖師さまが五十六歳七カ月を迎えられた昭和三年の三月三日から始まったんだよ。大本では〝五・六・七〟で〝みろく〟とも読んでいて、とても大切な数字なんだよ」
「昭和三年三月三日、五十六歳七カ月…。なるほど、三が三つならんだ日に、五六七の歳を迎えられて、それをお祝いされての祭典だったということですね」
「この日に聖師さまは、『今日こそは五十六年七カ月五六七（みろく）の神代（みよ）の始めなりけり』とお歌を詠まれて、みろくのご神業のスタートを宣言されているんだね。だから、私たちは、みろく大祭にお参りして、みろくの大神さまをたたえ、地上天国・みろくの世が一日もはやく到来しますようにと、心をこめてお祈りさせていただくんだよ」
「……」
「大地君、ぴんとこないかい？」
「ええ、いや、何となくわかるんですが…」
「そうか。じゃあね、たとえば、こういうことならどうかなぁ」
高村は例え話を始めた。

みろくの大神さまのご因縁

「大地君の会社はどんなことをしているのかな？」
「はい、よしだ工房っていって、ベーカリーなどの店舗用品や厨房器具なんかを製造販売している会社です」
「そうなんだ。で、会社の状態は順調かい？」
「は、はい、まあ順調だと思いますが…」
「そりゃあ良かった」
「ありがとうございます」
　大地はていねいに頭を下げた。
「社長さんはどんな人？」
「そうですね。いい人ですよ。人望もあって、経営手腕も優れた人だと思います」
「それじゃあ心配ないねえ」
「はい、大丈夫だと思います」
　大地は頷(うなず)いた。
「じゃあ、仮に、仮にだよ…、よしだ工房の経営状態が思わしくなくて、社員同士の

仲もぎくしゃくしていて、うまくいっていないとしよう」
「はあ？」
大地は首をかしげた。
「いや、あくまでも例えばの話だよ」
「はい」
高村は、話を続けた。

「社長さんは立派だけど、その下の役員がいまいちしっかりしてなくて、社員の統制もあやふやで、業績も右肩下がりになってきて、赤字経営に陥っていたとしよう。そんな時、新しくMさんという中年の男性が入社してきたんだ。Mさんはものすごく真面目で、一生懸命会社のために働いたんだ。最初は、古株社員からのやっかみもあったけど、もともとMさんが人格者で、実績も伴ってきたこともあって、だんだんと周囲の理解者も増え、しばらくすると会社の業績も回復してきたんだ。まさに〝救世主〟だったわけだ。数年すると、売り上げが黒字に転じて、右肩上がりになりかけた。それに、会社のお得意さんからの評判も良くて、よしだ工房はお客さんからの信頼も厚くなってきたんだなあ」

「ほ〜」
「でもMさんは、よしだ工房でのキャリアが短いということ、それに一平社員では、やれることに限界があったんだね」
「そうですね。実力のある人が役職を持って上に立てば、運営もずいぶん違ってくると思いますね」
「社長さんは、Mさんの働きぶりをじっと見ていてかなり好感を持っていたんだね。それは、仕事面だけでなく、人としても買っていたんだ。そこで社長さんは、自分の娘婿として、Mさんを迎えたらどうかと考えたんだね」
「なるほど」
「で、そのことを娘さんに話すと、彼女もMさんに対して好意を持っていたらしく、日ならず結婚することになったんだ」
「それはおめでたいことですね」

「さあ、その結婚が決まってわかったことがあったんだ」
「何ですか？」
大地は身を乗り出した。

「実はMさんは、よしだ工房の筆頭株主会社の優秀な社員で、よしだ工房とその顧客の窮地を救うために、特命をおびて派遣させられていたということがわかったんだ」
「なんとそういうことでしたか」
「このことは、社長も知らなかったんだね」
「内密で送り込まれた助っ人だったということですね」
「そういうこと。でも実は、このことはよしだ工房の先代社長と筆頭株主会社の会長との間で、以前に交わされていた〝密約〟だったんだね。先代の社長は『もしわが社がピンチになったら、どうか手をさしのべてください』と頼んでいて、会長もそれを約束していたんだ」
「だから会長の命で、優秀なMさんが送り込まれたということだったんですね」
「そういうこと。しかもMさんは、会長の孫だったんだよ」
少し真剣に話していた高村は、ネタばらしをした感じで、急に笑顔を作った。

「まあ、現実的にはこんな話はないだろうけどね」
「そうですよね」
大地も笑顔で答えた。

「つまり大地君、これを神さまの世界に例えると…、よしだ工房が、地の世界、この大地、地球ということなんだよ。そして、筆頭株主会社が、天の世界。Mさんが〝天のみろくさま〟と神さまが明かされた聖師さまだった、…ということなんだよ」

「なるほど」

「つまり、Mさんの素性がはっきりわかり、会社の中でそれ相当の役職に立って、業務に携わるようになったのが、昭和三年三月三日だった、ということなんだね」

「そういうことか！」

大地は大きく頷いた。

「ということで、みろく大祭というのは…、社長の娘と結婚したMさんが役職を得て積み上げた業績を、社員一同で讃えて、これから先、よしだ工房がより発展し、会社も、そして顧客の多くの店舗も共に栄えて繁盛するように、健闘を讃え合う祝宴…、と考えてもらったらいいんじゃないかなあ」

「なるほど、高村先生、よ～くわかりました！」

「そうかい、そりゃあ良かった」

高村も笑顔で頷いた。

「ただ…？」
「ん？　何だい？」
「今の例え話だと、Mさんがよしだ工房で働いていた年数がはっきりわからなかったんですが…。実際、大本の歴史の中で、聖師さまがみろくの大神さまだったということがわかるまでにどれくらいの期間があったんですか？　それから、どうやって聖師さまが、みろくさまだったってわかったんですか？」
「鋭い質問だね、大地君」
　高村はうれしそうな表情をしたかと思うと、真剣な顔つきになり、話を続けた。
「実はそこが、神さまのお仕組（しぐみ）の大きなポイントなんだよ」
「お仕組？」
「お仕組というのは、ご神業…つまり神さまがなさろうとするお仕事の計画のことで、難しい言葉でいうと経綸（けいりん）とも言うんだ」
「経綸ですか？」
「そのご経綸を進められるのに、最初から素性や予定がわかっていたら、それを邪魔したり、妨害する悪神も出てくるんだね。それで周囲にわからないようにして、そのご経綸を進めておられたんだよ」

「国祖の神さまを押し込めたような悪神に、神さまの計画が知られないようにされたということですね」
「その通り。で、そのご経綸を遂行なさるために、ギリギリまで隠しておられたんだ。しかも身内にまで。そして、知らされたのが大正五年の九月だったんだね。開祖さまのお筆先に、〝聖師さまが天のみろくさまであった〟、と示されたんだよ。何と、開祖さまもその時に初めて、その事実をお知りになったんだ。聖師さまが二代さまと結婚なさったのが、明治三十三年だから、それから大正五年までの約十六年間も秘しておられたんだね。しかも開祖さまがご昇天になるのが、大正七年だから、お亡くなりになる約二年前に、開祖さまご自身もお知りになったということなんだね」
「神さまのお仕組というのは、深いものなのですね。ということは…、昭和三年に聖師さまがみろく下生を宣言されたということだから、大正五年から数えると、え～と…、十二年もたってから、みろくの大神としてのお働きを宣言された、ということになるんですか？」
「そういうことになるね」
大地は、何度も頷いた。高村は、大地の感の良さに感心していた。

「あら、大地、なんだか真剣ね」
台所にいた京子が、話に入ってきた。
「いや、そりゃあ、〝深〜いお話〟を聞いてたからね」
「そうなの？」
京子は大地の顔をのぞき込んだあと、高村の方を見た。
「高村先生、コーヒーはいかがですか？」
「はい、ありがとうございます」
「夕食は町村さんのところでとられるそうなので、お食事を出せないのが残念ですが」
京子がテーブルにコーヒーを置いた。
「えっ、そうなの？　うちで一緒に夕食していただいたらいいのにねえ」
「もう恵子さんが準備していらっしゃるらしいのよ」
「何だそうなのか。残念だなあ」
「ありがとうございます。今回は突然に押しかけてきたんでね、またゆっくり来させていただきますね」
「そうしてください」
京子が大地の前にもコーヒーを置いた。

「ぜひ」
大地も高村に向かって言った。

「ところで大地君」
高村が話を変えた。
「さっき言ったけど、みろく大祭のことがわかってもらえたところで、大祭にお参りしないかなあ？」
高村が誘った。京子も相づちを打った。
「そうよ、行ってらっしゃい。綾部のおじいちゃんとおばあちゃんが喜ぶわよ。どうせ連休は暇なんでしょ」
「いやぁ、暇ってことはないけど…」
「まあ、ゆっくり考えてみて」
高村は再度参拝をうながした。
「わかりました。考えてみます」
「よし、決まり！」
「いや、お母さん気が早いよ」

三人は顔を見合わせて笑った。しばらくの間、大地にとって楽しい時間が過ぎていった。

「ごちそうさまでした。さて、そろそろ失礼します」

高村が、飲み干したコーヒーカップをテーブルに置いて言った。

「もうお帰りですか？」

「町村さんをお待たせしてもいけないのでね」

「先生、いろいろ、ありがとうございました。また来てくださいね」

「ありがとう。また寄せてもらうね」

「お母さん、高村先生がお帰りだよ」

台所から出てきた京子といっしょに、高村と大地は外に出た。

三人は挨拶（あいさつ）を交わし、高村は特派車に乗り込み、車を発進させた。

住宅街の角を右折する時、高村が窓から手を振っていた。

「お気をつけて！」

大地が大きな声で見送った。

名残の桜の花びらが、春風に乗って舞い散っていた。

みろく能

まだ暗いうちに、大地は自宅から車を出した。長野自動車道から中央自動車道に入ってしばらくすると、東の空が白み始めた。辺りが明るくなり、朝靄(あさもや)の中、車窓から見える山々には、芽吹き始めた木々が各々(おのおの)の鮮やかな色合いの新緑を呈している。山全体が、まるで水彩画で描かれたキャンバスのようだ。

「きれいよねぇ。私は今の季節の山の様子が一番好き」

助手席に座った母・京子が言った。

「そうだね。何とも言えないね」

ハンドルを握った大地が相槌(あいづち)を打った。

去年の四月末、大地は自宅に訪ねてきた高村浩一特派から、みろく大祭の参拝を勧められた。その時はどうしても行くことができなかったが、一年後の今年、連休を利用して綾部に行くことを決めていた。

大地は電車を利用して、一人で行くつもりだった。ところが、家族に綾部行きの話をしている時、二人なら車の方が交通費も安いし便利だ、ということになり、「じゃあ

私も行こうかしら」と京子が言い出すと、父・剛も「行ってきたら」と勧めた。そんなことで、京子も大地といっしょに綾部の実家に里帰りすることになったのだった。

渋滞を避けるために、五月三日の早朝に出発。しかし、大型連休とあって京都に近くなったころに渋滞につかまり、綾部の梅木家に着いたのは、正午前だった。

「ただいま」

京子が玄関を開けて声をかけた。

「おかえり」

中から京子の母・とも が出迎えた。

「大地、よく来たね」

「おばあちゃん、こんにちは。ご無沙汰しています」

「疲れたろう、さあ上がって」

「思ったより渋滞していてね、だいぶ時間がかかっちゃったわ」

そう言いながら、荷物を持って居間に入った。荷物をおろすと、京子は大地を促し、ご神前の間に行き、いっしょにお参りした。

京子にとっては、久しぶりの里帰りであった。いつもと違いちょっと嬉(うれ)しそうな雰

囲気の京子を、大地は微笑(ほほえ)ましく見ていた。
「お父さんは？」
礼拝が終わって、京子がともに訊(たず)ねた。
「今日はみろく能だからね、今、長生殿に行ってるよ」
「あっ、そうだ、今日はみろく能の日だったんだ。今年は長生殿の能舞台であるのね」
「何？　みろく能って」
大地が訊(き)いた。
「大本って、芸術活動が盛んじゃない。地方でも能楽をお稽古(けいこ)している信徒も多くてね。今日は信者さんや出口家の方、それから後半は、職分といって能楽のプロが能の舞台を勤めるのよ。おじいちゃんとおばあちゃんも、能楽のお稽古をしていたのよね」
「へぇ〜、おばあちゃん、すごいね」
「ちょっとお稽古していた程度だけどね」
ともが答えた。
「で、今日は何のお能があるの？」
「今日は、宝生流の〝難波(なにわ)〟だそうだよ」
「そうなの、めずらしい曲ね」

「そうだね。せっかくだから二人で見に行ってきたら」
「そうね、大地、行ってみようか」
「えっ、今から？」
大地はちょっとびっくりした。
「まあ、お昼を食べて休憩してからでもいいんじゃない。お能までには少し時間があると思うから」
「そうぉ、じゃあそうしましょうか」
…僕は行かなくてもいいよ。
大地はそう言おうとしたが、京子の勢いに負けて承諾してしまった。

一服してから、京子と大地は、梅松苑に向かった。駐車場に車を止めて長生殿に入り、神前で礼拝の後、老松殿に入った。拝殿の南側の障子やガラス戸、※舞良戸（まいらど）がすべてはずされ、能舞台が一望できるようになっていて、舞台では信徒による仕舞が奉納されていた。二人は老松殿の神前に進み、小さな声で礼拝した。
終わって見所（けんじょ）を見ると、舞台正面の中程に松太郎の姿があった。京子は近寄って後から松太郎の肩をたたき、目配せで後方の空いている席に着くことを告げた。松太郎

は頷(うなず)き、大地の顔を見て笑顔を返した。
「もうすぐ最後のお能ね。ラッキー」
入口で手渡された番組を見て、京子が小さな声で言った。
「ねえ、お母さん、これって無料なの？」
大地も小さな声で訊いた。
「そうよ、無料でね、一般の人も鑑賞できるのよ。すごいでしょ」
「僕、能を生で観るのは初めてだよ」
「そうよね。しっかり観て帰るのよ。ほら、ここに難波のあらすじが書いてあるから」
京子が番組の後に書かれている「難波」の解説文を指さした。大地はそれに目を通した。

能「難波」は、以下のようなあらすじである。
朝臣が熊野参詣から京の都に帰る途中、摂津・難波の里に立ち寄ると、老人と若者が天下泰平の春を詠い、梅の木陰を、杉箒(すぎぼうき)で掃き清めているのに出会う。臣下が「梅は名木か」とそのいわれを尋ねると、老人は〝難波の梅〟と答え、古今和歌集にも詠まれた難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄を語る。そして老人は、仁

徳帝の即位を推進し、この和歌を詠じた百済の王仁（わに・おうにん）であると身の上を告げて消え失せる。

春の夜、梅の神霊である木華咲耶姫と王仁が現れ、姫は梅の花を詠じて舞い、続いて王仁が難波を祝福して舞楽を奏し、古の聖賢と万歳の御代を讃える。

…何だかおめでたいストーリーのようだなあ。

大地はそう思った。しばらくして、鏡の間から囃子の〝お調べ〟（音合わせ）の音が聞こえてきて、見所が静かになった。

能「難波」は、型どおりに進められた。約一時間四十五分、観能初体験の大地にとっては、さすがに前半は、少し退屈気味であった。加えて早朝から車を運転してきたこともあり、時々睡魔も襲ってきた。それでも後半は、荘重なシテの舞と、明るく品のある謡と囃子の調子に引き込まれるような感じであった。

舞台が終わり、シテが橋掛かりから揚げ幕に入るころ、大きな拍手が湧いた。大地も何かしら満足した気持ちで、しっかり手を打っていた。

すべての演者が退場した舞台には、一陣の薫風が吹き抜けたようなさわやかさが残っていた。

夕食の時に、能「難波」が話題になった。
「初めてのお能は、大地にはちょっと退屈だったかもね」
京子が言った。
「いや、そんなことはなかったよ」
「あら、気持ちよさそうに船を漕いでいたようだったけど」
「あ、まぁ、確かに、時々ね」
大地は笑いながら言った。
「おまえはどうだったんだ？」
松太郎が京子に訊いた。
「おもしろかったわ。若い時と違って、この歳になると、何となく能の良さがわかるようになったのかもしれないわね」
「そうか、そりゃあ良かったなあ」
「ところで、今日の難波は、大本と何か関係があるの？」
京子が松太郎に訊ねた。
「難波のシテは百済から渡来した〝王仁博士〟で、その昔、千字文や論語をはじめ、

大陸の文化を携えて日本に渡来し、日本に外来の文化をもたらした貢献者なんだ。仁徳天皇を推薦した人物としても有名だな。王仁博士の〝王仁〟は、聖師さまのお名前の王仁(おに)三郎の〝王仁〟だろう。それから、難波の謡の中にも一部出てきた〝難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花〟という『古今和歌集』の歌は、王仁博士が作った歌だとも言われているんだよ」

「聞いたことある歌ね。確か、〝木の花〟というのは桜じゃなくて、梅の花のことじゃなかったかしら」

京子が言った。

「そう言われているなあ。それから、ツレの天女は〝木(こ)の花咲耶姫命(はなさくやひめのみこと)〟でこの神さまは、三代教主さまのご神格なんだ。それに、日本伝来の文化の神さまとも言われているから、登場人物からして、大本と関係深いものだと思うなあ」

「そういうことなのね」

「それから、亀岡の万祥殿能舞台の鏡松を描かれた有名な能画家の松野奏風(そうふう)先生が、大本竹田別院というところの襖(ふすま)に、この難波の一場面を描いておられるんだけどね。それは、ツレの木の花咲耶姫命が舞を舞っているところを、シテの王仁博士が眺めているところなんだよ。その絵をご覧になった三代教主さまは、ご自身の芸術活動をお

父さんである聖師さまが〝悦(よろこ)んで観ておられるようです〟と言われたそうなんだ。
三代さまは少女時代から、剣術をされたり馬に乗られたりしていたんだ。そうかと思うと、手習いやら短歌、お茶やお仕舞などをされたり、草花に夢中になられたりもした。一面、たいへんなご聖苦をなさった開祖さまや二代さまに対して、ご自身が申し訳ないような引け目を感じておられたそうだ。でも、その襖絵の難波の一場面をご覧になって、〝私の現在の責任に対して何だかフッと気が軽くなってきました〟ということをおっしゃったんだよ。つまり三代さまのご日常というのが、芸術の神さまとしての大切なご用をお務めになっていたということをあらためて自覚なさったということなんだろうなあ」
松太郎がしみじみと言った。
「その話を先に聞いてたら良かったわ。そのことを知って今日の舞台を観ていたら、聖師さまと三代さまをイメージしながら観られたかもしれないわね」
京子が残念そうに言った。
「なんか深い話だね…。ところでおじいちゃん…」
大地が松太郎に訊いた。
「聖師さまの王仁三郎という名前は、王仁博士からとってつけられた名前なの？」

「ん〜、そうではないけど、そうとも言えるかなぁ」

王仁三郎と鬼三郎

禅問答のような松太郎の答えに、大地は首をかしげた。

「おじいちゃん、どういうこと？」

「王仁三郎（おにさぶろう）の〝王仁〟は、百済（くだら）の王仁（わに）博士の名前からとられた名前でもあるんだけど、発端はそうではなかったということなんだよ」

「え？」

「実を言うと、聖師さまの王仁三郎というお名前は、開祖さまのお筆先で決められたものでな。つまり、神さまがご命名されたお名前ということなんだよ」

松太郎が答えた。

「あら〜、そうだったの？　知らなかったわ」

京子が驚いたように言った。

「ちゃんと『おほもとしんゆ』の中に書いてあるんだよ」

「あら、拝読してないことがバレちゃったみたい」

京子が笑いながら言った。

「まあ、『おほもとしんゆ』は全部で七巻あるし、その中の一カ所に示されていること

だから、京子が知らないのは無理はないけどな」
「ということは、おじいちゃんはどこにあるのか、わかるわけ？」
京子がちょっといじわるっぽい口調で言った。
「もちろんだ」
松太郎が自信ありげに言った。
「でもおじいちゃん…」
大地が、思いついたように言った。
「あの…、確か…、開祖さまのお筆先は、もともとほとんどが平仮名だったんだよね」
「そうだよ」
「それなのに、どうして王仁博士の王仁をとって、王仁三郎っていう漢字になったの？」
大地が言った。
「確かに！　大地、よく気づいたわね」
京子が言った。
「大地、的確な質問だなあ。よしよし、食事が終わったら、ゆっくり教えてやるからな」
松太郎はそう言いながら箸（はし）を進めた。

夕食が終わり、食卓を片付けて、松太郎と大地が向かい合って座った。
「おい、おばあさんも京子も座ったらどうだ」
松太郎が台所に向かって言った。
「今、洗い物しているから、済んだら行くわ。でも、ここからでも話は聞こえるからどうぞ進めていいわよ」
「そうそう、お先にどうぞ」
京子のそばにいた とも も言った。
「そうかあ？」
松太郎は少し残念そうに言うと、「じゃあ」と言って立ち上がり、ご神前の手前の部屋に行き、本棚から『おほもとしんゆ』を一冊抜いた。そして、「確かこれだったはずだが…」と小声で言いながら、ページをめくった。だが、お目当てのページがすぐにみつからず、しばらく探していた。

…あれ、おじいちゃん、遅いなあ。
大地がそう思った時、松太郎が戻ってきた。
「さすがにすぐに見つからなかったなあ」

そう言いながら、テーブルの上に『おほもとしんゆ』第一巻の目的のページを開いて置いた。

「ほらここにあったよ」

大地は松太郎が指さした部分を読み始めた。

明治三十六年旧六月四日

今度の御用は、各自同じ御用はさしてないぞよ。昔からの霊魂の因縁だけのことをさすぞよ。

出口直には筆先で知らさすなり、純子には筆先の代わりに口で言わさすなり、上田喜三郎は出口王仁三郎と名を替えさして、神界の経綸の御用に使うなり、役員は役員で各自に異うた御用を致さすから、同じ御用は一人も無いぞよ。

（第一巻　二五九頁）

「おじいちゃん、この上田喜三郎というのが聖師さまのことなんだね」

「そうだよ。聖師さまは亀岡の穴太というところで、上田という農家の長男としてお生まれになってな、幼名を喜三郎といったんだ」

「〝ようめい〟って？」
「子供のころからの名前ってことだな。綾部に来られて二代さまと結婚なさったときも上田喜三郎で、このお筆先にあるように、明治三十六年の六月から替わったということだから、三十二歳くらいまで、喜三郎という名前だったんだよ。それから、『おほもとしんゆ』の中では、上田喜三郎のほかに、〝上田海潮〟や〝海潮〟という別名で書かれている部分も多いなあ」
「そうなんだ」
　大地が頷いた。
「結婚なさったのはいつなの？」
「明治三十三年の一月だよ。だから、結婚後三年半たって、出口王仁三郎になられたということだな」
「神さまがそう決められたということだね」
　大地が頷いた。
「で、おじいちゃん、さっきの質問だけど、どうやって王仁三郎という漢字になったわけ？」

「実はなあ、喜三郎青年は、大本入りする前に一度、〝きさぶろう〟という同じ読みで、別の署名をしておられたことがあるんだ」
「署名？」
「喜三郎青年が、幽斎（ゆうさい）ということを研究されていたある日にな、〝ひそかに出修（しゅつしゅう）に行け〟という神さまからのお告げがあったそうだ」
「幽斎、出修…？」
「あぁ…、それを詳しく話しているとややこしくなるといけないから、今は説明しないけど、まあ…、神さまのお道を探求されるためのご用だと思ってくれ」
「うん、わかった」
「で、そのお告げのことや家族に内緒で出かけることを、喜三郎青年が斎藤という友人に話されたんだ。すると斎藤は、突然喜三郎が姿を消してしまうと、家族が心配するだろうから、もしもの時のために一筆書くようにと勧めたそうだ。それで喜三郎青年は、書き置きを書いて、最後に署名したんだが、どうしたことか、喜三郎ではなく、〝喜〟が〝鬼〟になって、〝鬼三郎〟と署名されたんだ。喜三郎青年は、鬼三郎も〝キサブロウ〟と読めるからいいんだろう、って思って書き直されなかったんだと」
「へえ～」

「そしたら、綾部に来て三年ほどたって、このお筆先が出て、〝おにさぶろう〟と神さまから命名されたわけだよ。それで聖師さまは、青年時代に書かされていた〝鬼三郎〟は、〝おにさぶろう〟と読むべきだったんだと悟られ、今度は〝おに〟を〝鬼〟ではなく、同じ発音の〝王仁〟にされた、というわけだ」

「なるほど、神さまは、何年も前に、聖師さまに〝鬼三郎〟と書かせて、本当の名前は、〝おにさぶろう〟なんだと知らせておられたということなんだね」

大地は感心して言った。

「そういうことだ。聖師さまは後に、若いときに書いた鬼三郎は、〝きさぶろう〟じゃなく、〝おにさぶろう〟と読むのであって、書き置きの署名の一件も、鬼門（きもん）の金神のお仕組だった、とおっしゃっているんだ」

「そうか、鬼門の金神ということは、国祖からのお知らせだったということだね」

大地は頭の中で、聖師さまのお名前の流れをあらためて追ってみた。

喜三郎
←
鬼三郎

←
おにさぶろう
←
王仁三郎

「それから確か…、『出口王仁三郎全集』の第一巻の中で、王仁博士のことに関して書き残しておられたはずだなあ」
「そうか、だから、おにさぶろうに名前を替えられたときに、〝鬼〟じゃなくて、〝王仁〟を使われたんだね」
「ああ、おじいちゃんも先輩たちからそういうふうに伝え聞いているよ」
「すごいねえ」
「それから、王仁博士の名前は、古事記や日本書紀にも出てくるなあ。日本書紀では、王仁だけど、古事記では、和邇吉師（わにきし）という名前で出ているんだよ。確かこんな字だったなあ…」
　と言いながら松太郎は、手元にあったメモ用紙に、二つの名前を書いた。
「こんな難しい字なんだね。おじいちゃん、よく書けるねぇ〜、すごいなあ」

「まあな」
松太郎は少し照れながら言った。
「日本書紀の中では、王仁は〝わに〟って読んでいたから、今でも聖師さまのことを〝わにさん〟とか〝わにさぶろうさん〟と呼ぶ人がいるんだけどね」
「へえ〜、そうなの」

神命

大地は無言で頷き、しばらくしてふと思い出したように口を開いた。

「そういえばおじいちゃん、さっきの話の中にあった、聖師さまが置き手紙を残して亀岡を出られることになった時の、神さまからの〝お告げ〟というのは、いったいどんなことだったの？」

大地の質問に、松太郎は「よくぞ聞いてくれた」と言わんばかりの笑みをもらした。

「大地、それを訊きたいか。よしよし、じゃあ、ちょっと待っててな」

と言いながら立ち上がり、また本棚がある部屋に行き、中から化粧箱に入った一冊の書籍を持ってきた。

「確かこれだ」

松太郎は化粧箱ごと大地の方に向けた。

「出口王仁三郎著作集」

大地がタイトルを読んだ。

松太郎は化粧箱から中身を取り出しながら話を続けた。

「この本はもう四十年くらい前になるかなあ、読売新聞社から出版されたもので、聖師さまが書かれたいろいろな著書が集められたものでな。全部で五巻あって、これはその第一巻なんだ。今は販売されてないけど、おじいちゃんが若いころに買っていた大切な本なんだよ」
「そうなんだ」
「で、この中に〝本教創世記〟という著述が百ページ以上収めてあって、そこに聖師さまの名前の由来話も書いてあるんだよ」
そう言いながら松太郎はページをめくった。
「本教創世記？」
大地は、文中に書かれた文字に目をやりながら言った。
「本教…、つまり大本が創世された記録という意味だろうが、内容は、新しい宗教としての大本を創り出していく経緯が中心になっていて、聖師さまが半生を回顧して書かれた自伝のようなものなんだ」
「そうか、だからこの中に、お若いころのエピソードとして書き残しておられるんだね」
「そういうことだ」
「ほら、ここだ。第九章…」
松太郎がページを指差し、大地ものぞき込んだ。

「何だか難しそうだねえ？」
「まあ、かいつまんで話そうかねえ」
「そうしてください」
大地が軽く胸の前で手を合わせて言った。

「まずは聖師さまが書かれた置き手紙の内容だけど、これだけあるんだ」
そう言いながら松太郎は二ページにわたる手紙の部分を指差した。
「難しい漢字がたくさんあるけど、どんな内容なの？」
松太郎は、活字を目で追い、大地がわかるように、意味をかみくだきながら説明した。
「今の世の中は野蛮で殺伐とした〝われよし、強いもの勝ち〟の悪魔の世になっている。日本人も精神が昔と変わってしまい、このままにしていたら、世界は破滅してしまう。今のうちに社会の風潮を一掃しなくてはならない。自分（聖師さま）は神さまが望まれる世界をつくるために、身も心も尽くして神さまにご祈願してきた。今や天の時がめぐってきて、自分の心身ともに神さまに捧げたので、もう自分のものではない。天下公共のために、神さまのみ心のままに働かなければならない。だから家族のことは忘れないといけないので、不在中はご神前に燈明をあげて、首尾よく神さまのご神命を遂げて帰ることを祈っていてほしい

……というような内容だったんだなあ」
「なんか、すごい内容だね。で、鬼三郎と署名されたわけだね」
「そうだなあ。そして、その続きに書いてあるのが、『之も全く、余一己の力で書いたのでなく、七、八分迄神の助筆であった』とあるから、書き置きの内容も、神さまが書かされたものだったということだなあ」
「そうなんだね」
大地は感心したように言った。
「で、神さまのお告げというのはどんなことだったの？」
「神さまのお告げを、〝ご神命〟というんだけど、その内容は、この文章の最初に書いてあってな…」

松太郎はページを戻した。
「ほら、ここに書いてある。『汝は今より修業の為めに西北の方位に向って旅行すべし。可成的秘密を要す』というご神命だ」
「えっ、西北に向かって行け、というだけ？　けっこうアバウトだね」
大地は少し笑いながら言った。

「そう、それだけだな」
松太郎も笑顔で答えた。
「神さまはどこへ行くのかは教えてくれないの？」
「そうだなあ」
松太郎は話を続けた。
「ただ、旅の途中で、ご神命が加わるんだよ」
「何だ、そうなの。で、どこへ行けって」
「聖師さまは夜中、午前零時に家を出られて、近くの小幡神社という産土（うぶすな）さんにお参りされて、その後、聖師さまが一週間の霊的修業をされた高熊山に参拝されたとあるなあ。それから、西北に向かって歩いていかれたんだ。そして一晩かかって、園部というところに着かれて、天満宮に参拝されたとある。たぶん大本ともゆかりのある生身（いきみ）天満宮だろう」
「生身天満宮？」
「菅原道真を祀（まつ）るのが天満宮だけど、園部は菅原氏代々の所領があって、道真公の邸殿もあったそうだ。道真公が太宰府に左遷を命ぜられた時に、道真公を慕っていた園部の代官が、道真公のことを思い、道真公の木像を彫って、ひそかに祠（ほこら）を建ててお帰りを祈念していたんだなあ。でも残念ながら、二年後に道真公は亡くなってしまうんだよ。そんないきさつがあ

って、園部の天満宮は、道真公が生きていた時から祀られていたということから、生身天満宮と呼ばれるようになったそうだ」
「へえ～、そんな天満宮があったんだね」
「道真公の没後、都で次々と悪いことが起こって収まらなくなり、道真公の祟りと恐れて、都をはじめ、各地で祀られるようになったのが天満宮なんだ。それが広がって後には、学問の神さま〝天神さん〟として祀り、今は全国に、一万二千社くらいあるらしいなあ」
「そんなにあるの？」
大地はその数に驚いた。
「だから、道真公が亡くなる前からお祀りしていたという園部の生身天満宮は、全国の天満宮の中でも、最も歴史の古い天満宮ということになるんだよ」
「日本最古の天満宮かぁ」
大地は大きく頷いた。

「で、聖師さまがその天満宮で、修業をされているときにご神命が下ったんだ」
「目的地がわかったの？」
「そう、ここだな。『身心を清めて、又々幽斎の神感法に入り、丹後の国の内宮、外宮を指し

て参上せよ、との神勅を拝受した……』とあるだろう」
「ということは、そこが目的地だということだね。で、いったいどこなの？」
「大本のその後の歴史からすると、〝丹後の国の内宮〟というのは、綾部から車で一時間くらいの福知山市大江町にある元伊勢内宮・皇大神社で、〝外宮〟は元伊勢外宮・豊受大神社ということになるなあ」
「じゃあ、聖師さまはそこへ行かれたんだね」
大地が松太郎の方を見て言った。

「いや〜、実は違うんだよ」
「えっ、どういうこと？」
「聖師さまも行く先が決まったと思われて、勇んで園部を出発されたんだけど、しばらく歩いて園部の西北の観音峠の頂上にあった茶店で休憩されていたら、また神さまからのご神命が下ったんだなあ。ほらここ……」
松太郎が文中を指差した。
「『山中に於て暫時鎮魂を修するの神勅を得て』とあって、聖師さまは、神命のまにまに山の中に入られて、また修行されたんだ」

「えっ、また」
「しかも、すぐには次の神命が下りなかったんだ。結局一晩修行されて、明け方になってようやくご神命が下がったんだそうだ。さて、どうなったと思う、大地」
「さあ？　まったくわからないけど…。まさか、目的地が変わったとか」
「正解！　と言うか、『園部迄引返すべし』…だと」
「えー、どういうこと？」

覚　悟

「大地もそう思うか！　神さまは、聖師さまに一旦目的地をお告げになったのに、ちょっと先へ進ませといて、一晩たったら〝引き返せ〟って。こりゃあ、今だったら誰もが酷（こく）な話だと思うだろうなあ」

「そうだよねぇ、なんか意地悪されているような感じだね」

大地は頷（うなず）きながら言葉を続けた。

「あっ、何か忘れ物でもあったんじゃないの？」

「忘れ物？」

大地の意外な返答に、松太郎は苦笑した。

「いや、そんなことじゃないんだよ」

「じゃあどんな理由なの、おじいちゃん」

「聖師さまも、これはおかしい、って思われたようだなあ。ほらここ」

と、松太郎は文中を指さした。

そこで余（よ）は、大（おお）に怪しんで神界へ其所以（そのゆえん）を奉伺（ほうし）した。

「私もとても怪しいと思って、その理由をうかがった…とあるだろう」
「はい」
「続けて、聖師さまが神さまにされた質問の内容が書いてあるなあ」

「私は神命を奉じて西北に向って参り、且又『丹後へ行くべし』との御教えなりしを固く守りて来れり。元伊勢詣りは神界より中止なされしや」と聊か質問的に神答を迫ったが、其時神は余に向って徐ろに、左の神示を賜わったのである。

「次が神さまの答えだね」
「そうだ」
松太郎は、文中を指さしながら読み進めた。

神は霊であるから、霊を以て霊に対するは真の道である。今汝は、全霊なる神の命を請けて、只一心に其旨を守り、神霊の地に到って修業せんとす。其志や誠に嘉賞すべし。汝が霊は、既に内宮、外宮に参詣したり。神は無遠近、無広狭、無明暗にして、

過去、現在、未来に通ずるものなり。汝の正霊、既に神前に安座せり。故に遙々丹後に到らずとも宜し。何れ二、三年の内には、肉体も参詣せしむる事あるべし。汝は是より園部の知己に頼〔便〕り、一週日の間、閑静なる室を借りて幽斎を専修すべし。

「ん…、どういうこと？」

「つまり、聖師さまは全身全霊を傾けて、神さまのご神命に従おうとなさったわけだ。その志、赤誠は時間や空間に関係なく、神さまのみ心に届いたとおっしゃっているんだよ。だから目に見える元伊勢の神前に行かなくても、聖師さまの魂はすでにご神前に座っておられると同じことだ、ということだなあ」

「なるほど」

「それに、二、三年の間には、聖師さまの肉体も元伊勢に実際に参拝することになると、予言されているなあ」

「おじいちゃん、それは事実だったの？」

「大地、そうだよ。三年後の明治三十四年には、元伊勢お水のご用というのが行われているから、そのころには聖師さまも元伊勢に参拝に行っておられるはずだなあ」

「予言通りだった、ということだね」

「そうだなあ」

「ただなあ、大地」
「なあに？」
「この一連の話で、おじいちゃんが〝大切だなあ〟と思うことがあるんだよ」
「どんなこと？」
大地は興味深げに訊いた。
「それはなあ、〝覚悟〟ということだよ」
「覚悟？」
「そう覚悟」
松太郎は頷きながら言った。
「この話の深意は、おじいちゃんたちには及びもつかないことかもしれないんだけど、ただ信仰のあり方、心得としてお手本とすべきことがあると思うんだ」
「それは？」
「聖師さまは、神さまのおっしゃることを疑うことなく、素直にお聞きになり、一生懸命に実行されているということなんだ。だから神さまは、その聖師さまの〝まこと

の覚悟〟を見届けられて、その目的を達したとおっしゃっているわけだ」
「つまり神さまは聖師さまの覚悟を試されたということ？」
「さあ、その神意はわからないけど、さっき説明した聖師さまの置き手紙や、園部へ引き返された時の神さまとの問答を見ると、少なくとも聖師さまの覚悟がわかるなあ。これが、まことの信仰のお手本じゃないかと思うんだよ」
「そうなんだね」
「信仰のことは、今大地に言っても、もう一つピンとこないかもしれないけど、覚悟というのはそんなものだと、おじいちゃんは思うんだよ」
「なんとなく分かる気がするよ」
「そうか。よかった」
松太郎は嬉しそうに言った。

「昔、大本のある立派な神の家の管理を預かった信者さん夫婦に、三代教主さまが、『あなたたちは、一生ここにおってや』とおっしゃったことがあるんだ。それでそのご夫妻は強い使命感と覚悟を持って、長い間、いろんなことを乗り越えて、神さまから与えられた自分たちのご用だと信じ、一生懸命に神の家をお守りされてきたんだ。もち

ろん、三代さまがご昇天になったあともね。
　ところが、年をとって二人とも体の不調を感じ出し、周囲の人たちに迷惑をかけるわけにはいかないし、このままではお約束したことが果たせないと覚悟を決められた。神の家を『守る』ということは、同時に『継続させる』ということでもあると言って、そこを後身にゆずり、故郷に帰られたんだ」
「立派な夫婦だね」
「そうなんだ。その時に聞いた話が印象的でよく覚えているんだよ」
「何？」
「三代さまが『一生ここにおってや』とおっしゃったのは、『その覚悟で神の家を守りなさい』という深いお諭しがあったんだと思えるようになった、とね」
「なるほど」
「考えてみると、『いついつまで』って期限を切られるのと、『一生の間』では、その覚悟の度合いが違うような気がするだろう」
「確かにそうだね。三代さまのおっしゃったことを、神さまのお言葉として素直に受け取って、強い覚悟で頑張られたんだね」

松太郎が、大地の言葉に反応するように、声に力を入れて答えた。
「大地、その『頑張る』という言葉だけど、今はその言葉がないと会話に困るくらいに使われる言葉だなあ」
「そうだねえ」
大地は、松太郎の話の展開にちょっとびっくりしたように反応した。
「実は『頑張る』という漢字は当て字で、『我に張る』から転じたという説があるんだ。もともとは、〝我意を張り通す〟、〝自分の意見に固執して譲らない〟という悪い意味の言葉だったらしいんだ。つまり、大本的に言うと、〝われよし（我良し）〟ということだ」
「へぇ〜、知らなかった」
「『頑張れ』が、好感的な言葉になったのは、ベルリンオリンピックで、ＮＨＫのアナウンサーが〝前畑ガンバレ！〟って絶叫したのがきっかけだったんだ。このラジオ中継に日本中が沸き立って、『頑張れ』が、忍耐し、努力するという良い意味での言葉として受け入れられるようになったという歴史があるんだよ」
「〝前畑ガンバレ！〟っていうのは、何となく聞いたことあるけど、まさかそれで言葉の意味が変わったとは、知らなかったなあ。じゃあ、〝頑張ります！〟って言うと、本当は、〝私の我を張り通します！〟と言っているということなんだね」

「そういうことだなあ」
「じゃあ、おじいちゃん、今までのような意味で『頑張ってね』って言いたい時には、何て言ったらいいの？」
「そうだなあ、京都弁だったら、〝おきばりやす〟ってところだろうが、標準語だと何と言うかなあ？」
松太郎もそこまで考えてなかったのか、腕を組んで考え込んだ。
「ん～？」
松太郎は、小声でいくつかの言葉を口にするが、適切な熟語が浮かばない様子であった。困っている松太郎の顔をのぞき込み、大地が笑顔で言った。
「おじいちゃん、ガンバレ！」

ギャラリーおほもと と 神教殿

「こりゃぁ大地に一本やられたなぁ…」
松太郎は、大地の顔を見ながら笑った。大地も、してやったりの顔で笑みを返し、なごやかな雰囲気がリビングを包んでいた。
居間の方から京子とともが入ってきた。
「おじいさん、そろそろ休みますか？」
ともが声をかけた。
「おう、もうこんな時間になっていたのか」
掛け時計を見て、松太郎が言った。
「まだ十時過ぎだよ、おじいちゃん」
「年をとると、早く床に着く習慣がついてしまっているんでなあ。その代わり、朝は早く目が覚めてしまうけど…」
松太郎は笑顔でそう言うと、テーブルに両手をついて、体を持ち上げるようにして立ち上がった。
「じゃあ、お先に。明日は教主生誕祭で亀岡まで行くから、七時には家を出ようかね。

みんなお参りに行くんだろう？」
「ええ、そのつもりよ」
京子が答えた。
「それじゃあ、おじいちゃん、明日は僕の車で行こうよ」
「そりゃあうれしいね。頼むよ、大地」
「まかせて、おじいちゃん」
「じゃ、おやすみ」
松太郎は笑顔で寝室に向かった。

翌朝、松太郎たち四人は、大地の運転で亀岡に向かい、午前八時半に天恩郷に到着した。
「私、なんだか、浦島太郎のような気分だわ」
京子が目の前に立つ立派なみろく会館を前に、目を丸くしながら言った。
「開教百二十年記念事業で、昔の安生館や事務棟が建て替えられて、こんな立派な建物が建てられたんだ」
「久しぶりに来て、あまりにも変わっていてびっくりしちゃった」

「ホント、きれいだね～。子供のころのぼんやりとした記憶とはまったく違う気がするなあ～」
大地も物珍しそうに見ていた。
松太郎は、いろいろと説明をしながら、三人をみろく会館に誘った。ロビーはすでに多くの参拝者でにぎわっていた。
「そうだ」
松太郎が思いついたように言った。
「祭典までまだ時間があるから、二階の〝ギャラリーおほもと〟に行ってみようか」
「お作品の展示室？」
京子が訊いた。
「そうよ、以前の作品展示室に比べると、広くてすごくきれいになっているの。亀岡に来る時は、いつも楽しみにしているのよ」
ともが笑顔で言った。
松太郎たち四人は、二階に上がり、〝ギャラリーおほもと〟に入った。
「ん～、いい雰囲気だね」

大地が小声で言った。
「大地、これがお筆先だよ」
そう言いながら、松太郎が入口正面のハイケースの前に進み、三人が後に続いた。
「おじいちゃん、僕、本物を見るのは初めてだよ。何ともいえない威厳があるなあ～、すごいねぇ！」
大地はお筆先の和綴本をのぞき込みながら感激した表情で言った。
「大地もそう感じるか！　神さまが書かれた書だからなあ」
松太郎は小さく頷きながら答えた。大地の横にいた京子は、しばらくして左奥のハイケースに歩み寄った。
「キラキラ耀いていて、やっぱり耀盌はきれいねぇ～」
京子は、耀盌「深山」に見とれている。
「こんなにたくさんのお作品を拝見できてありがたいね」
ともも耀盌に近づき、しみじみと言った。それから四人は、展示してある一つ一つのお作品をじっくりと拝見して回った。
「宗教団体の中には、日本や世界の美術品を購入して展示している立派な美術館を持

っている教団もあるけど、大本では、そうした作品は一切展示してないんだ。ここにあるすべてが、大本の歴代の教主・教主補さま方がお作りになったり、お書きになったものばかりで、それがこのギャラリーなんだよ」

「なるほど、それはすごいなあ」

「それに、信仰に裏打ちされた芸術活動そのものが、大本のみ教えの大きな特徴でもあるんだよ」

「おじいちゃん、そういえば以前、長野で特派の高村先生から、〝芸術は宗教の母〟っていうお話を聞かせてもらったんだ。その時に、素晴らしい芸術作品を目の前にした時、表面だけを見るんじゃなくて、そこから何を感じるかという感性が大切だと教えてもらったよ」

「ほう〜」

「確か、聖師さまは、『美は神さまの〝姿〟で、宗教は神さまの〝心〟だ』って言っておられたそうで、食事に例えると、宗教が主食のご飯だとすると、芸術は副食のおかずのようなもので、両方のバランスが、とても大切だとも教えてもらったんだよ」

「ほう〜、そのことを大地はおぼえていたのかい」

「すごく印象的な例えだったんでね。もちろん、大本の芸術作品は、ここにあるお作

品だけじゃないと思うけど…。でも、こうしていると、普通の美術品に囲まれているのとは違う感覚が湧いてくるような気がするなあ」
「そうかい、それは良い心がけだ。無理にそれを言葉で説明しようとしなくてもいいんだよ。その感覚、感じたものを大地の魂の中に残せたら、それでいいんじゃないのかなあ」
「おじいちゃんの言ってること、何となくわかるよ」
「そうか、そりゃあ良かった」
松太郎は大地の素直な感想と穏やかな表情を見て、心満たされる思いになっていた。

その後四人は、みろく会館を出て、東光苑広場で行われていた直心会や青松会によるバザーに立ち寄り、万祥殿内に入った。
午前十時から、教主さまご臨席のもと、「教主生誕祭、三代教主・教主補聖誕祭」が厳かに執行された。
祭典後の行事も終わり、直会の後には野点席にも入席し、聖地・天恩郷の雰囲気を満喫した。

四人が神教殿の前まで来たとき、後方から、「梅木さん」と声をかけられ、松太郎が振り返った。
「あ、高村先生」
「お久しぶりです、梅木さん。おや、雨宮さんもごいっしょでしたか」
「あらー先生、こんにちは。ご無沙汰(ぶさた)しております」
京子があいさつした。
「こんにちは。その節にはお世話になりました」
「いいえ、こちらこそ」
「お〜、大地君も参拝に来られたんだね」
高村は大地の姿を見つけて声をかけた。
「高村先生、こんにちは」
「大地君、ようこそ」
「先生との約束、一年越しになったけど、ようやく参拝に来られました」
「良かったね」
そう言いながら、高村は大地の手をとって握手をした。
「ありがとうございます」

大地も嬉しそうに答え、しばらく話が弾んだ。
「大地君、またいずれ、この神教殿で大道場修行を受けられたらいいね」
「道場？　修行ですか？」
高村は、大地の疑問を察したかのように話を続けた。
「修行といっても、大地君が想像しているような〝難行苦行〟をするわけじゃないんだよ」
「そうなんですか？」
「大道場修行は五日間、神さまの教えのお話を聴かせていただくプログラムが中心なんだよ。それに道場といっても、ここは武道場じゃないからね。〝大道場〟というのは、〝神さまの大道を学ぶ場所〟ということ、〝修行〟というのは、〝行いを修める〟という意味なんだよ」
「なるほど、そういうことで大道場修行ですか」
大地は納得したように頷いた。
あっ、いけない…、高村が思い出したように言った。
「すみません、万祥殿へ行かないといけないので…」
「お忙しいのに、すみません」

京子が言った。
「ではまた、後ほど」
そう言ってお辞儀をし、高村は万祥殿の方へ向かった。
午後からの「第二十回全国愛善歌奉納大会」では、高村が司会を務めていた。また、松太郎とともが、綾部みろく分苑の合唱団員として出場。そのことを直前に知った京子と大地には、ちょっとしたサプライズだった。

夕刻、亀岡を後にした四人は、途中のレストランで夕食をとり、天恩郷での一日の話題に花を咲かせ、午後八時過ぎに帰宅した。
「大地、くたびれたんじゃないかい？」
ともが大地に訊いた。
「そうだね、でも何だか、今日は心地よいくたびれだね。おばあちゃんこそ、大丈夫？」
「大丈夫だよ。親子三代でお参りできたんだからね。今日もたくさんおかげをいただいたよ」
ともが嬉しそうに言った。
「そうね、ありがたい一日だったわ」

京子もしみじみと言った。

お玉串袋

「さあ、じゃあ、寝るとするか」
松太郎が眠た気な目で言った。
「そうね、先に休んで」
京子が言った。
「明日はみろく大祭だから、七時半には出ようかね」
「えっ、大祭って十時からじゃないの？」
京子が訊(き)いた。
「早めに行動する方がいいからなあ。それに、遅くなると近くの駐車場が満車になるから、早く行った方がいいんだよ」
松太郎は京子の方を見て言った。
「そうだね。わかったわ」
京子が納得したように頷(うなず)いて、おやすみなさい、と言った。
「おやすみなさい」
大地も松太郎に声をかけた。

「はい、おやすみ」
そう言って松太郎はリビングを出た。
「大地もくたびれただろう、もう寝るかい？」
ともが訊いた。
「そうだね。いつもよりだいぶ早いけど、たまには健康的でいいかもね」
「布団は敷いてあるからね」
「おばあちゃん、ありがとう。いつもベッドだから、綾部に来て、たまに畳の部屋の布団で寝るのはいいんだよね。じゃあ、お母さん、お先に！」
「はい、おやすみなさい」
「おやすみなさい」
大地は二人にあいさつし、居間に向かった。

翌朝、穏やかな光が部屋に差し込み、窓外から小鳥のさえずりが聞こえてきた。大地はいつもより少し早く目が覚めた。
洗面を済ませ、布団をたたんでリビングに向かうと、台所では ともと京子が朝食の支度をしていた。

松太郎は、リビングに座り、何やら筆を走らせていた。
「おじいちゃん、おはようございます」
「おはよう、よく眠れたかい？」
「うん、ぐっすり眠れたよ。今日は爽やかな朝だね」
「ああ、気持ちのいい朝だなあ」
大地は、台所の二人にも朝のあいさつをした後、松太郎の手元に目をやった。
「玉串袋に名前を書いているの？」
「そうだよ。今日の大祭の玉串やそのほかにお供えする玉串を準備しているんだ。さて、これで最後だな」
松太郎の前に並んだ玉串の袋を見て、少し驚いたように大地が言葉を続けた。
「おじいちゃん、そんなにたくさんあるの？」
「たくさん？　そうか、大地にはそう思えるんだなあ」
「大祭のだけかと思っていたんで……」
「みろく大祭はもちろんだけど、ほかにもいろいろ祭典があるんで、できるだけさせていただくんだよ」
「そうなんだね。で…、どんな祭典があるの？」

「玉串受付に行った時、すぐにわかるように、右肩に祭典の名前を書いたから、これを見てもらったらわかるよ」

松太郎は、見やすいように玉串袋をキチンと並べた。大地はそれに目をやり、袋の右肩の文字を読んだ。

みろく大祭
老松殿
みろく殿大神様
祖霊大祭
万霊大祭
奥都城祭典

「六つもあるんだね」

と言いながら大地は少し困惑した表情になった。

「北海道や九州のように、遠いところから旅費を使って参拝に来られる信者さんのことを思ったら、地元に住んでいる者としては、当たり前のことだよ。あと、緑寿館に

お参りできる時は、そのお玉串も用意するんだけどね」
松太郎が、かみしめるように言った。
「あの〜、おじいちゃん。僕も同じだけしないといけないの？」
「大地も働いているんだから、大地自身の名前でお供えしたらいいけど、あまり無理はしないで、できる範囲の〝まごころ〟をさせていただいたらいいと思うよ。それに、お母さんもお供えするだろうしなあ」
「あっ、そうか、じゃあお母さんと連名で書いてもいいんだね」

大地の言葉に、松太郎は頭（かぶり）を振った。
「いや、連名は避けた方がいいんだよ」
「えっ、どうして？」
大地が不思議そうに訊いた。
「確か聖師さまが『玉鏡』の中で書いておられたと思うけど、連名ですることは神さまに対して、ご無礼にあたることなんだよ」
「どういうこと？」
「たとえば、何人かで千円ずつ出し合って玉串を包むとした場合、その時の思い、想

念が良くないんだよ。何人かで相談すると、イヤでも出さなきゃならない、という不純な気持ちが混じってしまうから、神さまは決してお受け取りにならないんだそうだ。問題は、玉串の額ではなくて、その人の〝まごころ〟が大切なんだよ」

「なるほど、そういうことか」

大地は、一応納得しながらも、言葉を続けた。

「じゃあ、雨宮家の家族一同で玉串をお供えする場合はどうするの？」

「その時は、家族全員の連名にするんじゃなくて、世帯の代表者の名前でお供えすればいいんだよ」

「そうか、だからこのお玉串には、おじいちゃんの名前を書いているんだね」

「そう、このお玉串は、梅木家の代表者として書かしてもらっているんだよ」

「そういうことか」

大地が頷いた。

「だから、うちはお父さんの名前でお供えするからね。大地、そこにある玉串袋に書いてくれる？」

台所から出てきた京子が大地に向かって言った。

「えっ、僕が書くの？」
「そうよ、お父さんの代わりにね。今、暇でしょ」
「まあ、それはそうだけど…」
大地は、分かったよ、と言いながら、松太郎から筆ペンを借りて、松太郎が書いた玉串袋を参考に、父・雨宮剛の名前を玉串袋に書いた。
「大地、後で私も書くから、袋を置いといてね」
京子が言った。
「えっ、お父さんの名前だけじゃだめなの？」
「それはそれ。私も、私の名前で別にお供えさせていただきたいのよ」
「へえ～、そういうもんなの？」
「それが私の〝まごころ〟というものよ」
「そうですか」
大地は首をひねったが、何となく京子の気持ちがわかった。
「じゃあ僕も、大祭だけ、僕の名前でしようかなあ？」
「しようかな、じゃないの！　させていただく気持ちが大切なのよ。まあ、でも感心、感心」

京子がすかさず、大地の言葉尻をつかまえつつも、笑いながら言った。
「わかったよ」
「大地、その気持ちが尊いんだよ」
松太郎が諭すように言った。

「あっ、袋が足りないや…。そうだ、玉串の受付に行ったら置いてあるよね」
そう大地が言うと、松太郎は大きく頭(かぶり)を振った。
「その気持ちは感心しないなあ、大地」
「えっ」
大地は驚いたように言った。
「受付に行けば玉串袋があるから、それをもらえばいいんだ、という気持ちはいかんのだよ。あの袋はあくまでも、玉串を忘れて来たり、あとで不足に気づいた人のためのものということで置いてあるんだ」
「そうなんだ」
少し間を置いて、松太郎が話を続けた。
「たとえば、お世話になった方に御礼を包んで持って行くとしよう。その場合、その

人の家に行ってから、ご祝儀袋をくださいって言えるかい？」
「ん……」
「相手先で、ちょっと待ってください、って言って、袋に名前を書くことができるかい？」
「いやぁ～、それはさすがにできないでしょ」
「そうだろう。ましてや神さまにお供えさせていただくお玉串だ。事前にちゃんと準備して、大切に持参することが大事なんだよ。それが信徒の心得というものだ。神さまは目に見えないからって、いいかげんなことをするといかんぞ。ちゃんと見ておられるからな、大地」
「なるほど、気をつけないといけないね」
「わかればよろしい」
　松太郎は大きく頷いた。
「それから大地、玉串袋は隣の部屋に買い置きがまだあるからな」
「おじいちゃん、それを先に言ってよ」
　大地は苦笑いした。

玉串とは

ともと京子が朝食の支度を調えている間、大地は松太郎と一緒に朝拝を行い、終わって四人で手早く朝食を済ませた。

その後、予定していた時間に車に乗り込み、大地の運転で梅松苑に向かった。長生殿の南にある寺町駐車場には、まだ駐車スペースがあり、入口に近いところに車を止め、歩いて苑内に向かった。

「おじいちゃん、まだだいぶ時間があるね。ちょっと早かったんじゃない」

「そうだなあ、でも、ゆったりした気持ちでお参りする方がいいんでなあ」

松太郎が大地に言った。

「おじいちゃんは、何でも早め早めにする方だからね」

京子が大地に向かって言った。

「その娘なのに、どうしてお母さんは違うのかなあ？」

大地が京子の顔をのぞき込むようにして言った。

「あら、どういう意味？」

京子が笑いながら答えた。

苑内に入ると、松太郎夫妻は、地元や地方の知人と何人も出会い、その都度挨拶(あいさつ)したり、近況を語り合ったりした。京子と大地も会う人ごとに紹介され、思った以上に時間が経(た)った。

「おじいちゃんたち、知り合いが多いね」

松太郎夫妻が地方の信徒と懐かしく話しているそばで、大地が京子に耳打ちした。

「そうね。まあ、大本の中で長く生きているからね」

京子が笑顔で答えた。

ようやく四人は、長生殿の地下入口から入り、亀の間の玉串受付に向かった。

「ここで玉串を渡すんだね」

「そうだよ。それぞれに三方(さんぼう)があるだろう」

「ホントだ、おじいちゃんが書いてた通りだね」

大地も自分で用意した大祭の玉串を係の人に手渡し、大祭のしおりとお下がりをいただいた。

その後、四人は長生殿内に入り、比較的前の方に座ることができた。
「お母さん、今日は四年前の節分大祭より前の方に座れたよ」
大地が京子に言った。
「早く出てきたかいがあったわね。祭典が始まるまでには、まだ少し時間があるけどね」
京子の言葉を聞きながら、大地が隣の松太郎の方を向き、思い出したように話し掛けた。
「さっき、お玉串を出した後に思ったんだ。すごく基本的なことだろうけど…」
「ほう」
「そもそも〝玉串〟ってどういう意味なの？」
大地の質問に松太郎は、頷(うなず)きながら話し始めた。
「そうか、玉串袋のことは話したけど、玉串のことは話してなかったなあ」
そう言いながら、松太郎は少し体を大地の方へ向け、言葉を続けた。
「大地が玉串袋に名前を書くときに、お玉串は〝まごころ〟でさせていただくことが大切だ、と言っただろ。その〝まごころ〟を形に表したのがお玉串なんだよ。昔、先輩から、〝玉〟つまり自分の〝魂〟を串につけてお供えするから玉串というんだ、って

聞いたことはあったけどなあ」
「なるほどね。でも確か、祭典の中で、松をお供えするのも同じ玉串というよね」
大地はさらに尋ねた。

「そうだなあ。大本では、玉串というと雌松の小枝にシデをつけたものだなあ。今日の大祭でも、教主さま、斎主をはじめ、各代表者がお供えして、最後に参拝者代表にあわせて、参拝者全員がお参りするあの玉串だ」
「そうだよね」
「実は玉串というと、神社などでは、榊の小枝にシデをつけたものが一般的なんだ」
「確か、そうだね」
「そもそも〝たまぐし〟というのは、〝榊〟の別の呼び方でもあって、榊自体を玉串とも言ったようなんだ。古い文献には、〝太玉串〟とか〝八十玉串〟とか書かれていて、神さまにお供えする榊の枝に、木綿とかシデをつけたものということなんだ。木の綿と書いて〝もめん〟と読むけど、あれで〝ゆう〟と読むんだよ。〝木綿〟と言ったら、楮という木の皮をはいで、その繊維を蒸して水に浸して裂いて糸状にしたもので、神社などで神事に使うんだよ」

「じゃあ、同じ漢字でも、〝もめん〟と〝ゆう〟では違うんだね」
「もめんと言ったら、綿、コットンのことだなあ」
「なるほど、おもしろいね」
「シデというのは、紙を垂らすと書いて、紙垂（しで）と言ったり、単に垂らすという一字（垂）でシデとも読むんだ。それから、垂らす手（垂手）や、ほかに、四つの手（四手）とも書くなあ。ほら、紙のシデは四つの長方形が斜めにつながっているように見えるだろう」
「ああ、あのしめ縄なんかに付いているヒラヒラした紙だね」
「そう、あれもシデだね」
「木綿とシデを合わせて木綿四手（ゆうしで）と言うこともあるなあ」
「でも、大本では雌松にシデをつけたものが玉串なんだね。どうして？」
大地が尋ねた。
「聖師さまのお示しで、この大地ができたときに、最初に発生した植物が雌松だからと聞いているんだ」
「へえ〜、そうだったのか！」

「意義的には、シデが衣食住の衣、衣服。松の小枝が衣食住の住、住居を作る材木の〝型〟と教えられているんだよ」
「なるほど。じゃあ食は…？」
「祭典の中で、献饌（けんせん）というのがあって、神饌物といってたくさんの食物をお供えするんだけど、それが文字通り、食にあたるんだよ。だから、お供えする神饌物と玉串で、〝衣食住〟をあらわすということになるんだよ」
「あっ、そういうことか。なるほどね」
「衣食住はすべて神さまからいただいたものだから、神饌物と玉串を通してそのご恩に感謝する気持ちを神さまにお供えさせていただくんだ」
　大地が頷きながら、ご神前の方に目をやり、首をかしげた。
「あれ？　でも、おじいちゃん、もう両脇にお供え物があるけど、あれは？」
「祭典中の本献饌ではお供えしきれない神饌物をあらかじめ八足の両袖にお供えしてあるんだよ。副献饌と呼んでいるけど、副献饌だけでもたくさんあるなあ。全国の信者さんから、大祭にお供えしてくださいと届いたものも多いんじゃないかなあ」
「じゃあ、その本献饌では、どのくらいお供えしてるの？」
「献饌のあとに数えてみたらいいけど、確か三方が三十台近くあるんじゃなかったか

なあ」
「そんなにあるんだね」
ふと気づくと殿内は参拝者で徐々に埋まってきていた。大地は辺りを見回してから、また松太郎に訊いた。
「おじいちゃん、話は戻るけど、玉串のこと…、受付で出した玉串は、お金だよね。あれは、〝まごころ〟をお金で表すということなんだね」
「まあそういうことだなあ。ただ…」
「ただ…、何？」
「大本では袋に〝御玉串〟と書いてあるけど、一般的には〝料〟を付けて、〝御玉串料〟と書く場合が多いんだよ。それは、榊の玉串の代わりとして納める金銭のことだったり、祈祷やお祓いの謝礼として納める場合も表書きに〝御玉串料〟と書くようだなあ。同じような意味の言葉で〝幣帛料〟という場合もあるんだ」
「でも大本では〝料〟は付けないのね。その方がいいわよね」
京子が横から口を挟んだ。それを遮るように、大地が言った。
「どっちにしても、神さまにお供えをする場合は、〝心を込めて〟、ってことだね、お

じいちゃん」
「その通り」
「でもまあ、意味を知っていることは大切なことだし、意味がわかると心も込もるんじゃないの」
京子が言った。

〝ドーン！〟
「あ〜、ビックリした」
大地が報鼓の音に驚き、後方を振り返った。
「祭典まであと十分だな。太鼓は、五回・六回・七回と打つんだ」
「五回・六回・七回？」
「それぞれ後の二回は続けて打つんだ。五・六・七で〝みろく〟だからね」
「そういうことかあ」
殿内のアナウンスが流れ、玉串捧奠（ほうてん）者の名前が呼び出された。その中に松太郎の名前があった。
「あれ、おじいちゃんじゃないの？」

「実は今日、参拝者代表で玉串捧奠をさせていただくんだ。じゃあ、前に行くとするか」
「なんだ、そうだったのか。おじいちゃん、〝まごころ〟で玉串捧奠してください」
大地が確認するような口調で言った。
「そうだな」
松太郎はニコニコしながら、席を立って最前列の毛氈(もうせん)席に移動した。
しばらくして、みろく大祭が始まり、祭典は厳かに進められた。玉串捧奠では、松太郎の後姿を見ながら、大地も心を込めて礼拝した。

直　会

みろく大祭の祭典が終わり、祭典後の行事も済んで直会（なおらい）に移った。玉串捧奠（ほうてん）者席に座っていた松太郎が、大地の横に戻ってきた。

「おじいちゃん、ご苦労さまでした」

大地が松太郎に声を掛けた。

「ああ、ありがとう。気持ちよくお参りさせていただけたよ」

「良かったわね」

京子が言った。

「大地、祭典はどうだった？」

「とてもすがすがしかったよ。それに毅然（きぜん）とされた教主さまのお姿がきれいで、印象的だったなあ。ごあいさつも、こんなに近くで聞かせていただいて、感動しちゃったよ」

「そうかい、それは良かった」

直会とお茶が、縁側の直会係から手渡しで配られてきて、大地たちも受け取った。

「そういえばおじいちゃん、大祭にはたくさんの係の人がいるけど、みんな本部の人

なの？」
「いや、そうじゃないよ。信者さんたちが大勢ご奉仕しているんだよ。主に近隣の近畿圏の人が多いけど、全国から大勢の信者さんがご奉仕に来られるんだ。祭典や直会の係、玉串受付、場内整理や下足預かり、食堂やお茶席などいろいろなところで、大祭の準備や執行に関わるお手伝いをされているんだ。終わったらそれぞれの片付けをしなきゃならないし、忙しいんだよ。でも、こうした大勢の方のご奉仕があって、大祭が執行できるんだよ。ありがたいことだなあ」
松太郎がしみじみと言った。
「私たちも少し前までは、お手伝いに入っていたのよ。でもね、ちょっと年がいってきたんで、最近はこうしてゆっくり参拝させていただいているんだよ」
ともが言った。
「そうだったんだね。ご苦労さまでした」

大地が少し頭を下げながら言った。その時、直会のカバーを見た大地が言った。
「おじいちゃん、これで〝なおらい〟って読むの？」
「そうだよ」

「知らないと、絶対〝ちょっかい〟って読んじゃうね」
大地が笑いながら言った。
「なるほどそうかなあ？」
「あ〜、そうかもね。私たちは子供のころから聞いていたから何とも思わなかったけど。初めて見た人は読めないかもね」
京子が感心したような表情で言った。
「どうして直会って言うの？」
大地が京子に訊いた。
「それは、その…。おじいちゃんが教えてくれるからね」
京子が松太郎の方を向いて答えを促した。大地も松太郎の方を見た。

「直会というのは、〝直り会う〟という意味で、宴の原初の姿だって言われているんだよ」
「直り会う？」
「昔の人たちは、お米やお酒に始まる食べ物というのは、すべて天地のみ恵み、神さまからいただいたものという自覚があって、食べ物を神さまにお供えして神事を行い、感謝の気持ちを捧げたんだ。祭りというのは本来、神さまと人々とが真に釣り合うと

書いて、真釣り（祭）という意味があるんだよ」
「つまり、今日のようにたくさんの神饌物をお供えした大祭も〝真釣り〟なんだね」
「そう。太古の人たちも神事の時は、みんなが平常とは違って、特別に気持ちを整え、緊張感を持ってお参りしたんだね。そうした平常と違う特別なことを〝ハレ〟（晴れ、霽れ）と言うんだ」
「晴れ着のハレね」
　京子が言葉をはさんだ。
「そうだよ。で、〝ハレ〟の反対が〝ケ〟（褻）で、つまり普段通りに戻るということだ。昔から日本人は、日常と非日常を使い分けていたので、そんな言葉が生まれたんだろうなあ。華やかで晴れ晴れとして、穢れを晴らした〝ハレ〟の神事から、〝ケ〟の平常に戻るということ。つまりみんなが平常に〝直り会って〟、お下がりを調理して宴を催したんだね。だから、祭典の後の宴を直会と呼ぶようになったんだよ。今は時間や参拝者の数の関係で、お下がりを調理したりすることはできないので、こうした神事の後のお弁当や食事を直会と呼んでいるんだよ。でも本来は、この直会までがお祭りの一環だから、直会はハレの延長でもあるかもしれないね」
「なるほど、そんな深い意味があったのかあ」

大地が頷きながら言った。
「どう、わかったでしょ？」
「え～、お母さんも初めて知ったんじゃないの」
大地が京子に言った。
「はい、勉強になりました」
しばらくして教主さま、斎主らが直会席に着かれ、司会の発声で参拝者一同、二代教主さまの三首のお歌を唱和し、直会が始まった。
大地は、松太郎から聞いた直会の話を思いながら、おいしく直会をいただいた。

〝ごちそうさま〟の唱和の後、四人は長生殿の大廊下に出た。
「おじちゃんあれだね。教主さまがごあいさつの最後に紹介されていた本を販売しているんだよね」
「『新抄 大本神諭』だな。じゃあ、早速買っておこうかな」
「私が買ってきますね」
ともが言うと、京子が遮った。
「あんなに並んでるし、私が行くわよ。で、何冊？」

京子が松太郎に訊いた。
「そうだなあ、とりあえず六冊買っておこうかな」
販売のコーナーには人だかりができていた。しばらくして、京子が『新抄 大本神諭』を買って戻ってきた。
「安いわね、一冊五百円しないのよ」
と言いながら、京子はともに本を手渡した。松太郎は、財布から千円札三枚を出して京子に渡した。
「あら、いいのに」
と京子が言うと、松太郎は手のひらを京子に向けて言葉を遮(さえぎ)った。そして、ともが持った『新抄 大本神諭』の中から二冊をとり、そのうちの一冊を京子に返し、一冊を大地に渡した。
「京子と大地のお土産(みやげ)だ」
「えっ、ホント。ありがとうございます」
大地が松太郎にお礼を言った。
「どういたしまして」
と言いながら松太郎はもう一冊を手にし、ページをめくった。

「ほう、いいね。カラー写真もあって、今の教典の『おほもとしんゆ』とはずいぶんと雰囲気が違うなあ。でもこれなら、心ある人には気安く渡せるなあ」
と言いながら、松太郎はさらにページをめくった。
「大本用語の解説や、いろんな案内も載っているなあ。これは人型のおすすめに回る時に使えそうだ。いずれまた、まとめて注文しないといけないなあ」
「いいですねぇ」
横からのぞき込んでいたともも、あいづちを打った。

長生殿を出た四人は、緑寿館前を降り、金竜海畔での野点席に入席した。席に入るまで十五分ほど並んだろうか、野点席は大人気であった。
しばらくして四人の前に、お菓子とお茶が運ばれてきた。五月晴れのもといただくお菓子と薄茶の味は格別で、床几（しょうぎ）に座った四人は、自然と笑顔になっていた。

「梅木さん」
横から一人の男性が声を掛けてきた。
「あっ、本宮（もとみや）さん、久しぶりだね」

「ご無沙汰しております。お元気でしたか」
「はい、おかげさまで」
「奥さんもお元気そうで」
「はい、ありがとうございます。お久しぶりですね。本宮さん」
ともが笑顔で応え、横にいる京子と大地を紹介した。
「本宮さん、娘の京子です。それと孫の大地です」
「確か、昔、実家でお会いしたことがありましたね」
お辞儀をしながら、京子が思い出すようにして言った。
「そうです。あのころは、ご結婚前でしたよね。じゃあ、こちらはご子息ですか」
本宮が大地の方を見ながら言った。
「そうです、うちの愚息でございます」
「雨宮大地です」
「そうですか。大阪の本宮敏夫です。よろしくね」
「よろしくお願いします」
大地も頭を下げた。
「本宮さんは私の友人で、いろいろお世話になったんだ」

松太郎が本宮を紹介した。
「いえ、こちらこそたいへんお世話になってたんですよ」
「祖霊大祭はお参りするの？」
松太郎が訊いた。
「はい。今日は奥都城まで参拝して、ゆっくり帰ろうかと思っているんです」
「そう。じゃあ、奥都城が終わったら、わが家に寄っていかない？」
「でも、お孫さんたちもいらっしゃっているのに、お邪魔でしょうから」
「いえ、私たちはまったく構いませんから、どうぞいらしてください」
「どうぞ、どうぞ」
京子とともも来訪をすすめた。

年祭と奥都城

松太郎たち四人は、野点席で本宮と別れてから、みろく殿に向かった。

殿内に入り、前方へ進みながら、大地は金竜海側の仕切りのある部屋に目をやり、四年前のことを思い出した。

「おじいちゃん、四年前、あそこで〝みたままつり〟のことについていろいろ教えてもらったよね」

「そうだったなあ。あの時は、香ちゃんの二十年祭の申し込みをしたんだったなあ」

「そうだね。ということは、今年は二十四年ってことか」

と大地が言うと、

「生まれていたら、三月で二十四歳になったんだね。早いわね」

京子がしみじみと言った。

「ということは、来年で二十五年ってことね。じゃあ、年祭をお願いしないといけないのかしら？」

「二十五年祭はないんだよ」

松太郎が答えた。

「あら、そうなの？」
「大本では、亡くなってから五年までは毎年年祭を行って、その後は十年祭、十五年祭、二十年祭となるんだ。で、二十年からは、五十年まで十年ごとに年祭を行って、五十年祭の次は百年祭になるんだよ」
「じゃあ、つぎは三十年祭ね」
「そうだな、でも、遺族が年祭をしたいと思えば、毎年お願いしても何も問題ないし、むしろ丁寧で、みたまさんもお喜びになるだろうなあ」
「そうなのね。でも百年祭となると、孫以上の世代に引き継がないといけないわね」
「そうなるだろうなあ。大地の子供や孫が、立派にみたままつりを引き継いでくれるといいがなあ」
「今からしっかり教育しておかないとね」
そう言いながら、京子が大地の方へ目をやった。
が、大地はそんな京子の視線に気づかなかったかのように、祖霊社の方を見つめ、〝生まれていたら、どんな妹だったんだろうなあ〟と、妹・香のことを想像していた。

その後四人は、殿内右側の祖霊社の前に座り、祭典執行を待った。

「結構いっぱいになってきたね」
大地が後ろを振り返り、殿内を見渡しながら言った。みろく殿には、三々五々、参拝者が入殿してくる。
「そうだね。ご先祖さまのお祭りだから、皆さんしっかりお参りされるんだよ」
ともが言った。
「ぼく、ここでの祭典にお参りするのは初めてだなあ」
「確か大地が小さい時には、お参りしたことがあったと思うけど、覚えてないだろうねえ」
「そうなの？」
「あった、あった。でもまだ二歳くらいじゃなかったかしらね」
京子が言った。

午後二時、春季祖霊大祭が始まった。祭典は型どおり進み、玉串捧呈（ほうてい）の後、大地は『おほもとのりと』を手に、真剣に「神言」を奏（あ）げた。その後、万霊大祭も終わり、参拝者は奥都城（おくつき）に移動。大地たち四人も、みろく殿前からシャトルバスに乗り、奥都城に向かった。

幸い四人は、一便のバスに乗ることができた。車内に入り、ともと京子が並んで座り、松太郎の横に大地が座った。

「おじいちゃん、これからどこまで行くの？」

「春と秋の大祭の最後には、天王平で奥都城祭典があって、それにお参りするんだよ」

「遠いの？」

「いや、五分くらいで着くよ」

「何だ、そんなに近いのか」

そう言いながら、大地は大祭のしおりを取り出して、祭典名を確認した。

「あ、これだね」

と言いながら、祭典・諸行事の最後の方に記されていた「奥都城祭典」に目をやった。

「おじいちゃん、初歩的な質問かもしれないけど、そもそも奥都城って何？」

「お、そうだ、説明してなかったなあ、すまん、すまん」

松太郎はそう言うと、奥都城の説明を始めた。

「奥都城というのは、天界に帰られた大本の歴代教主・教主補さま方のお墓のことなんだよ。つまり現時点では、開祖さま、聖師さま、二代教主さま、三代教主さま、尊

師さま、そして四代教主さまのお墓のことを言うんだよ」

「あ、そうなの」

大地が頷(うなず)きながら言った。

松太郎は内ポケットからペンを取り出し、大地が手にしていた大祭のしおりを取り、奥都城祭典の「奥都城」と「天王平(てんのうだいら)」に線を引き、その上のスペースに、四つの言葉を書いた。

奥津城
奥城
奥つ城
彩霞苑

松太郎はしおりを大地に返して、説明を続けた。

「一般では〝おくつき〟は、〝奥つ城〟と書くようだな。〝つ〟は〝の〟の意味の昔の言葉だから、〝奥の城〟ということだ。

〝奥〟は文字通り奥深い意味の〝奥〟や、〝置く〟ということ。〝城〟は、取り囲んだ一

郭の場所という意味があるから、〝奥の城〟は、奥まった場所にある境域、神や霊がおさまり鎮まっている所やお墓という意味なんだ。だから一般的には、神道式のお墓のことを言うようだなあ」

「そういう意味なんだね」

「神道では、〝奥つ城〟の〝つ〟に、都や津を当ててあるけど、〝都〟は、神官などをつとめた人のお墓に使われて、〝津〟は一般の信徒の墓に使われるそうだなあ」

「そんな使い分けがあるんだね」

「大本では、歴代教主・教主補さま方のお墓の場所を、〝都〟を当てて〝奥都城〟、信徒のお墓がある場所を〝津〟を当てて〝奥津城〟と呼んでいるんだよ。そして、信徒の個々のお墓の墓石には、〝都〟や〝津〟を入れずに、〝○○家代々祖等之奥城〟と刻んであるんだ」

「ということは、そこには信徒のお墓もあるということ?」

「そうだよ。梅木家のお墓も、天王平にあるんだよ」

「そうなんだね」

大地は頷いてから、また質問した。

「天王平っていうのは、そのお墓のある場所のことなの？」
「そうだよ」
「おじいちゃん、天王平ってどんな意味があるの？」
「〝天王〟は、神さまの呼称でもあるから、大本信徒にとっては歴代教主・教主補さま方のことを指すのじゃないかなあ。〝平〟というのは、山間の平地のことだから、天王平というのは、神さまがいらっしゃる神聖な領域ということだと、わしは思っているんだ。……ほら大地、ここからが天王平の登り口だよ」
バスは減速して、急坂を登っていく。

「この一体が天王平だ」
松太郎は前方を左から右へ指差しながら言った。
「それから、この向こうには、信徒と綾部市民のお墓とがいっしょになった天王平共同墓地という区画もあるんだ」
そう言いながら、松太郎は右手前方を指さした。
「信者さんのお墓だけじゃないんだね」
「この一帯は、昭和二十五年当時、一宗教団体だけに墓地として認可が下りなかった

ようで、そうなったらしいんだ。だからここは、主に第二次大本事件までの大本の先人と、綾部市民の共同の墓所になっているんだよ」

「なるほど」

松太郎はさらに前方を指さして言葉を続けた。

「その後、おじいちゃんが中学生だった頃、この奥の一帯が当時の綾部市長のはからいで大本に譲渡され、墓所として整備されて、三代教主さまが〝彩霞苑〟と命名されたんだ。そこに、梅木家のお墓もあるんだよ」

「〝彩霞苑〟というのは、これだね。霞が彩る苑か、きれいな名前だね」

大地は大祭のしおりに松太郎が書いた〝彩霞苑〟の文字を指さした。

「〝彩霞〟というのは、〝きれいな朝焼けや夕焼けの雲気や美しい色のかすみ〟という意味があるらしいなあ。その彩霞苑は二万九千坪の広さだから、昨日参拝した亀岡の天恩郷より広い面積になるんだ。もちろん、丘陵地全体だから墓所だけの広さじゃないけどね」

「へえ〜、広いんだね」

「だけど、二十年くらい前にそこの収容も限界になったので、〝大本信徒共同墳〟とい

うのが完成したんだ」
「一口にお墓と言っても、いろんな歴史や意味があるんだね」
大地は感心するように頷いた。

間もなくバスが坂を上り切り、奥都城前の所定の位置に着いた。四人はつくばい前まで来て、手と口を清めた。
「祭典が始まるまで、まだ時間がありそうだから、先にお墓にお参りしようかね」
「そうしましょうか」
松太郎の誘いに、ともが答えた。

お墓参り

「私、お墓参りは久しぶりだわ」
京子がそう言うと、大地が小声で反応した。
「僕は、初めてかなぁ…？」
「どうだったかしらね～？」
大地の問いに、京子も首をひねった。
「大地がまだ小さいときに、いっしょにお参りしたことがあったと思うよ」
ともが答えた。
「そうなの。まあ、でも今日が初めてのようなもんだね」
大地が言った。
「お松は残っているかなあ？」
そう言いながら松太郎が、つくばい左手奥の事務所の入り口に目をやった。バケツの中には、松の小枝が入っているのが見えた。
「まだ少し残っているようね。分けていただきましょう」
ともが言った。大地たちは、ともが松の小枝を手に戻ってくるのを待ち、いっしょ

に彩霞苑の大本信徒共同墓地に向かった。

「共同墓地にはいくつかの区画があって、この右側の奥のD地区に、うちのお墓があるんだよ」

松太郎が大地に説明した。

「この垣根の向こう？」

「そうだよ」

「広そうだね」

「その前に大地、あそこの建物に手桶（おけ）と柄杓（ひしゃく）があるから、水をくんで来てくれないか」

松太郎は左手を指し、大地に頼んだ。

「わかった」

そう言って大地は急いで水をくんで戻ってきた。

「早かったわね、じゃあ、行きましょうか」

京子が言った。

松太郎の案内で、D地区に入ってすぐ、大地が驚いたように言った。

「うわ〜、やっぱり広いね」

「どこに梅木家のお墓があるのか、いつも迷うのよね。ん〜、やっぱりわからない〜」
京子が言った。
「お母さん、ここに案内板があるけど…」
「こんなにたくさんあるんじゃ、この中から探すのもたいへんよねぇ」
「そうだよね。おじいちゃんとおばあちゃんは、すぐにわかるの？」
大地が尋ねた。
「もちろんわかるよ」
ともが答えた。
「ここで迷っていたら、ご先祖さまに申し訳ないからなあ」
「そりゃあ、そうだね。それにしても、ここはお墓なのに、とてもさわやかな感じがするのが不思議だなあ」
大地が笑顔で言った。
「そうなのよね。〝明るいお墓〟って感じね」
京子も同感した。
「こっちだよ」
京子と大地は、松太郎とともについて立ち並ぶ墓石の間を進んだ。

「ここだ」
松太郎が梅木家の墓の前で立ち止まった。
〝梅木家代々祖等之奥城〟と、大地が声に出して読んだ。
「さっきおじいちゃんが教えてくれたようにほってあるね」
大地が確かめるように言った。
「大地、松立ての水を替えてくれるかい」
「はい」
京子が一対となっている御影石の松立てからステンレス製の筒を抜き取り、溜(た)まっていた水を足元に捨て、元に戻した。そこに大地が、手桶の水を柄杓ですくって、ゆっくりと注いだ。それから、ともが持っていた松の小枝を立てた。
「今日はお参りできると思ってなかったから、お供えがなくてすみません」
ともが墓石に向かって頭を下げながらそう言った。
「時間もないので、早速お参りしよう」
松太郎に促されて、三人は松太郎の左右に並んだ。
「じゃあ、いっしょに」
松太郎の先達で、四人はいっしょに天津祝詞(あまつのりと)で礼拝した。

「さて、そろそろ祭典が始まるだろうから、戻ろうかね」
「そうね、急がないとね」
京子が言った。
「おじいちゃん、僕、これを返してくるね」
大地はそう言うと、小走りで先に進んだ。
大地は手桶と柄杓を元の場所に戻すと、松太郎たち三人を待って合流し、奥都城へと向かった。

春の夕暮れの日差しが、松の木の間から穏やかに差し込んでいる。大地たちと同じように、祭典前にお墓に参った参拝者が何組かあり、同じ方向へ向かって歩いていた。
大地は松太郎と並んで歩きながら、松太郎に訊いた。
「おじいちゃん、ご先祖さまのみたまは、みろく殿の祖霊社にお祀りされているって聞いたけど、お墓にもお祀りされていることになるの？」
「お墓で霊魂の抜けた亡骸を拝んでも意味がないと思う人があるかもしれないけど、そうじゃないんだよ。現代のお墓というのは、そのほとんどが亡くなった人のお骨を

納めるところだよね」
「そうだね」
「大本のお墓では、お骨を骨壺から出して、直接土にかえすんだけど、お骨は亡くなった人の体の一部だよね。生前は肉体を持って、この世で家族といっしょに暮らしていたんだから、残された人にとっては、その肉体に対してどうしても親しみや未練というものがあるんだよ。だから、その肉体の一部であったお骨をお墓に納め、そこに石碑を建てて入魂することによって、そこが魂の依り代になるんだ。だからお墓は亡くなった人との情的なつながり、絆の場所と言えるんじゃないかなあ」
「なるほど」
「たとえば、今の梅木家のお墓には、わしの両親のお骨も納めてあるんだ。でも大地は生前の二人とは会ってないから、情的なつながりは薄いと思うんだ」
「それはそうだね」
「でも、おじいちゃんにとっては、大切な親だったわけで、情的に深いつながりがあるだろう。だから、お墓に来れば、両親のことを思い出すし、懐かしくなるんだ。で、お参りすることによって、両親のみたまもお墓に来てくれると思うんだよ」
「そうか！　亡くなった人の魂と出会える場所なんだね。そう思うと、とても神聖な

感じがしてくるね」
大地は頷きながら、さらに訊いた。
「それから、おじいちゃん、さっきお参りしたときには、おじいちゃんちの祖霊さまのお参りのときにあげる〝祖霊拝詞〟じゃなくて、〝天津祝詞〟だったけど、どうして？」
「いい質問だ、大地。時々お墓の前で祖霊拝詞をあげている人があるんだけど、あれは適切じゃないんだ」
「そうなの？」
「普通、一つのお墓に納めているお骨は、その家の直系だけで、親族縁者のお骨が入っているわけじゃないんだよ。ということは、祖霊拝詞の文言には合わないわけだね。だから、お墓では、天津祝詞や神言のように祓いの祝詞で、ご先祖の魂に神さまの言霊をとなえて、ご先祖さまのみたまが霊界で向上されるよう祈らせてもらうんだよ」
「なるほど、そういうことなんだね。あっ、それからもう一つ」
「何だい？」
「大本のお墓は、一般のものと比べてとてもシンプルで、サイズもほとんど同じみたいだけど、何か理由があるの？」

「大本のお墓の石碑や台石の寸法は、聖師さまが基本的な大きさを示されていて、それをもとにした寸法で作ってあるからなんだよ」
「だから、墓地全体が整然とした感じがしたんだなぁ」
「それからほかにも大切なことがあって、お墓を重視するあまり、神社のように石の玉垣や燈籠(とうろう)を造ることはよくないんだよ」
「世間では、びっくりするような豪華なお墓もあるよね」
「あるなあ。それから、墓石の御影石をツルツルに磨くことや、墓地の表面の土をコンクリートで塗り固めるのもよくないそうだ」
「いろいろあるんだね」
「それから、共同墓地の先にあった大本信徒共同墳は、平成四年に完成して、大勢のお骨を共同で納めることができるようになったんだ。春と秋には、そこの前で、共同墳と天王平にあるすべての墓地の合同祭典が行われているんだ。お墓のことだから、普段参拝されないような遺族や親族も参拝されるんで、とてもありがたいことなんだよ」
「お墓ってやっぱり、情的なつながりが強いんだね。おじいちゃん、いろいろ勉強になりました」

大地はそう言って軽く頭を下げた。松太郎は笑顔で大地のしぐさを見た。

奥都城の前には、すでに大勢の参拝者が祭典の執行を待っていた。

「大地、できるだけ前の方へ行こう」

松太郎が促した。

「せっかくだから、前へ行きましょう」

京子が大地の背中を押した。

「わかってるよ」

四人が祭場の前方まで進んだとき、司会の発声が響いた。

〝ただ今より、奥都城祭典を執行いたします。教主さま、祭員入場〟

夫婦の縁

典礼を先頭に、教主さま、斎主、祭員が、奥都城前へ進まれる。玉砂利を踏みしめる音が耳に心地よい。正中両脇に並んだ参拝者は、軽く頭を下げ、それに倣って大地も頭を下げた。

祭典は、修祓から始まり、斎主が「奥都城祭典祝詞」を奏上。続いて、教主さま、斎主に続いて、各代表者が玉串を捧げた。参拝者代表の玉串捧奠では、大地も心静かに礼拝。続いて、教主さまのご先達にあわせて天津祝詞を奏上した。

祭典が終わり、教主さま、斎主、祭員が退場。松太郎は、ほかの参拝者の動作に合わせて、少し正中に体を向け頭を下げた。それをまねるように、大地たちも正中に向き、頭を下げた。ただ、大地の横を教主さまが通られる時、大地は思わず頭をもたげ、教主さまのお姿を拝し、その後ろ姿を見つめてしまった。

大祭執行副委員長の挨拶で、みろく大祭のすべての祭典・行事が終了した。天王平に差し込む日差しは、すっかり春の夕暮れの光に変わっていた。

松太郎が大地の方を向き、声を掛けた。

「ここが、開祖さまをはじめ、大本の歴代教主・教主補さま方の奥都城で、最初に、右手の開祖さまの奥都城が造られたんだよ」

奥都城前の案内板の前で、前方と案内板を交互に見ながら、松太郎が説明を始めた。

「ここだね」

大地が、開祖さまの奥都城を見ながら言った。

「もっとも、大正七年に開祖さまがご昇天になって最初に造られた奥都城は、大本事件で壊されてしまったんだがなあ」

「えっ、お墓まで壊したの。ひどいことするなあ」

「まったくその通りだなあ。だから、この開祖さまの奥都城は、事件後に再建されたものなんだよ」

「そうなんだね」

大地が頷(うなず)きながら言った。

「その左隣が、昭和二十三年に造られた聖師さまの奥都城。そしてその間の少し後ろにあるのが、二代教主さまの奥都城で、ちょうど扇の要(かなめ)のような位置に造られたんだ。二代さまの現界でのご用が〝要のご用〟と言われるけど、奥都城の位置も、二人の教祖さまの間にあって、まさに要の位置にくるように配置されたんだな」

「なるほど、そういうことか」
「そして、その右後ろが三代教主さま、左後ろが尊師さまの奥都城になるんだよ。それから、尊師さまの奥都城の後方にある桜は、コノハナザクラで、亀岡・天恩郷にあったものをここへ移植されたんだ」
「えっ、あの桜がコノハナザクラなの？　知らなかったわ」
　京子が驚いたように言った。
「あらそう？　あの桜は、天恩郷の朝陽舘前の斜面に植わっていたのを、四代教主さまが、コノハナザクラと気づかれたものなのよ」
　ともが京子に向かって言った。
「そうだったの。それじゃあとても貴重な桜よね。花が咲いたときに見に来たいなあ」
　京子がうれしそうに言った。
「で、その四代教主さまの奥都城が、あの左の少し離れたところにある奥都城なんだね」
　大地が案内板の図から目線を左手に動かしながら言った。
「そういうことだなあ」
　松太郎が頷いた。
「じゃあ、戻ろうかね」

そう言って、松太郎は奥都城に向かって深々と頭を下げた。
「はい」
大地たち三人も松太郎に倣ってお辞儀をし、天王平入り口に向かった。

車道では、参拝者がシャトルバスを待って列を作っていた。
「まだ、大勢並んでるね」
大地が言った。
「わしらは地元で家が近いから、最後のバスでもかまわんし、ゆっくり待たせてもらおう」
「そうだね」
大地たち四人は、最後の便で梅松苑に戻った。その後駐車場まで歩き、午後五時過ぎに梅木家へ帰ってきた。

「はい、ご苦労さんでした」
リビングに座りながら、松太郎が大地と京子に向かって言った。
「おじいちゃん、今日はありがとうございました。いい一日でした」

大地が松太郎に御礼を言った。
「いろいろ勉強できたね、大地」
「そうだね、お母さんもね！」
大地が笑いながら言った。
「はいそうです、ありがとうございました」
京子がそう言うと、梅木家のリビングに笑い声が広がった。
「お茶でも入れましょうか？」
ともが言うと、京子も一緒に立ち上がって、台所へ向かった。

しばらくして、玄関のチャイムが鳴った。
「こんにちは、本宮（もとみや）です」
玄関の方から声がした。
「は〜い」
京子が玄関に向かった。
「そうだった、本宮さんが来てくれるんだったなあ」
「あれ、おじいちゃん忘れてたの？」

「いや、そんなことないけど」
松太郎は笑いながら、大地の言葉を否定するように言った。
程なく、京子が本宮敏夫を案内してリビングに入ってきた。
「梅木さん、大地君、おじゃまします」
「お～、本宮さん、よく寄ってくれたね」
松太郎が立ち上がって応え、大地も笑顔で会釈した。
「本宮さん、お引き留めしてすみませんでしたね」
ともが台所から出てきて挨拶した。
「いえ、せっかくいただいた機会ですから、せめてご挨拶だけでもと思いまして…」
「まあ、そうおっしゃらずに、ゆっくりしていってください」
京子が言った。
「そうそう、夕食でも一緒に食べてね」
松太郎があらためて誘った。
「いえ、それは…」
「今すぐ準備しますから、ちょっと待っていてくださいよ」
ともがすすめた。

「では、お言葉に甘えて…。梅木さん、お参りさせていただいていいですか？」
そう言って、本宮はご神前で礼拝し、再びリビングに戻ってきた。

松太郎と本宮は旧交を温めるように、話に花を咲かせた。ともと京子は台所で夕食を準備し、出来たものからテーブルに運んだ。本宮は大阪から車で来ていたため、アルコール抜きでの食事となったが、おいしい料理に舌鼓を打ちながら、話が弾んだ。そばで大地も楽しそうに二人の会話を聞いていた。
「大地、本宮さんご夫妻のなれそめの話がおもしろいんだぞ」
「えっ、そうなんですか？　聞かせてください」
「いや～、ちょっとめずらしいってだけだよ」
「聞きたいなあ～」
「じゃあ…」
そう言って本宮は、自らの体験談を語り始めた。

本宮が二十七歳の時、母親が末期の膵臓（すい）ガンになった。本宮は母親に告知せず、病

院で看病していた。
そんなある日、母親が突然言い出した。
「敏夫、嫁さんをもらってくれないか。私はもう先は長くないから、生きている間に嫁さんをもらってほしいんだ」
本宮は驚いたが、うすうす自らの寿命を感じていた母親がかわいそうに思えた。
「そんな弱気になったらいかん。それに、まだ結婚しようという気もないし、嫁さんにしたい女性もいないから…」
そう答えた。
母親の願いを断るには、本宮なりの理由があった。

話は三年前にさかのぼる。本宮には婚約を交わそうと決意した女性がいた。しかし、母親が大反対をして、その結婚話が流れてしまったことがあった。反対された時、その理由を尋ねたが、母親は「とにかく認めない」の一点張りだった。
この結婚話は、本宮の周囲ではすでに周知の事実だったが、母親の耳に入れるのが遅くなってしまっていた。本宮は最初、そのことに不満を持った母親が、意地で反対しているのだと思った。だから、時間をかけて説得すれば、そのうち認めてくれるだ

ろうと高をくくっていた。しかし、一カ月たっても、二カ月たっても、母親の反対の意思が変わることはなかった。

本宮が、なぜそこまで反対するのか理由を尋ねても、「理由はない。とにかく私は認めない」と言うだけだった。

度重なる説得も功を奏さず、母親は最後に、思いも寄らないことを言い出した。

「その娘と結婚するなら、私を殺してから結婚してくれ」

そこまでの意思の強さに、本宮も母親を説き伏せる言葉をなくしてしまった。本宮はついに、涙を飲んで婚約を諦めてしまったのだった。

相手の女性はもちろん、その両親、友人や周囲の者からも責められ、本宮は針のむしろに座る思いであった。

そんなことがあり、本宮は「もう絶対に結婚はしない」と心に誓い、母親に反発していた。

それなのに今になっての母の「嫁さんをもらってくれ」という身勝手な話は、本宮にとって受け入れ難いことだった。

しかし、母親の願いには、本人も気づいていない不思議な理由があったのだ。

不思議な出会い

その後、看病の期間が長くなり、本宮は、日ごとに弱っていく母親の姿をみるにつけ、次第に哀れに思えてきた。それまで、母親の無茶な頼みを聞き流していたが、少しずつ思いを変えていた。

……老い先短い母のために、結婚するふりだけでもしておこうか。

そう思うようになった。

本宮はある日、母親に告げた。

「おれ、結婚してあげるよ」

「そうか」

母親はことのほか喜んだ。

「ところで、相手は誰？」

本宮が尋ねると、意外な答えが返ってきた。

「知らん！」

本宮はあきれた。

「知らんのに結婚できるわけないやろ！」

本宮はいぶかりながら言葉を継いだ。
すると母親はおもむろに口を開いた。
「誰か知らんけど、ちゃんと用意されとるんや」
「どういうこと？」
「大阪本苑の月次祭に行ってくれ。そしたら、本苑のトイレ掃除をしている女の子がおるから、その子は私の娘やから、家に帰ってきてほしいんや」
本宮は不思議に思った。なぜなら母親自身、半年以上も入院しているわけで、その間一度も大阪本苑にお参りしていない。ましてや本苑のトイレ掃除を誰がしているかなど、知るよしもなかったからである。それなのに、〝トイレ掃除をしている女性が相手だ〟というのだ。
何とも絵空事のような話である。
「で、その人はどこの誰？」
と尋ねても、母親は〝名前も、所も知らん！〟というのである。
「そんな雲をつかむような話、納得できるわけないやろ」
しかし、何度言っても、母親の答えは同じだった。
「とにかく、来月の大阪本苑の月次祭に行ってくれ」

それでも本宮は、結婚相手がいると言い張る母親を安心させるために、「わかった、わかった」と、渋々承諾した。

翌月、本宮は大阪市西成区にある大本大阪本苑の月次祭に参拝した。本苑に着くなり、本苑のトイレへ行ってみた。

果たしてそこには、母親が言うように、一人の女性がトイレ掃除をしていたのである。

本宮は、「不思議なことがあるなあ」と思ったが、「大所帯の本苑だから、たまたまトイレ掃除している人もいるだろうしなあ」と思い直した。その日、本宮は女性の名前も聞かないで、祭典にお参りだけして帰った。

帰宅後、本宮は病院の母親の元を訪ねた。

「女の子がおったやろ」

「ああ、おったよ」

「何で連れて帰ってこんかったんや」

「そんな、犬や猫じゃあるまいし、初対面の女性にいきなり〝結婚してください〟って頼んで連れてこられるわけないやろ」

そう説明しても、母親は納得しなかった。そして、

「その子は私の娘や」
と強く主張するのである。
「なんでや」
「なんでやもなんも、私の娘なんやから」
と母親は訳のわからないことを繰り返すばかりだった。
そしてさらに、
「頼むから来月もう一回行って、その娘を連れて帰ってきてくれ」
と頼み入るのであった。
それからというもの、母親は毎日のようにベッドの上から繰り返し頼むので、本宮も仕方なく、翌月も大阪本苑に出掛けた。

するとやはりくだんの女性が一人でトイレ掃除をしていた。本宮は不思議に思いながらも、意を決して名前を尋ねてみた。
「あなた、お名前は？」
「光橋隆子と言います」
「何でトイレ掃除をしてはんの？」

「はい、病気がちの父が、自分の代わりに大阪本苑へお参りに行ってくれと言うもので、参拝に来ました。それで、トイレを使おうと思ったら少し汚れていたので、お掃除させてもらっていました」

その日はそこまでの会話をしただけで、月次祭後本苑をあとにし、本宮は病室の母親を訪ねた。

「おったやろ」

「ああ、おったよ」

「所と名前も聞いたか」

「ああ、聞いたよ」

本宮は彼女から聞いた住所と名前を告げた。

「その家へ行ってご両親に頼んで、その娘をもろうてきてくれ」

本宮は、「何と無茶なことを言うんだ」、と思いながらも、母親を安心させたい一心で、仕方なく光橋家を訪ねることになった。

数日後、本宮は先方の自宅を訪ね、彼女の両親に、自分の素性と母親の病状を伝え、

そして申し訳なさそうに、来訪の理由を正直に話した。すると先方の父親から、意外な言葉が返ってきた。

「まあ、本人が良いならいいですよ」

本宮は拍子抜けしたが、さらに言葉を続けた。

「では、ご本人にお話ししてもよろしいですか？」

「どうぞ、どうぞ」

思わぬ展開となってきた。本宮の母親と先方の父親が親しい間柄ならまだしも、顔も知らないのに、あっさりと承諾されたことに驚くほかなかった。

本宮は、続いて隆子に会い、「実は…」と、事の顛末を話した。その上で、その後のことを頼むことにした。

「いきなり結婚というのも無茶な話なので、とにかく一度母に会ってみて、婚約するふりをしてもらってもいいでしょうか？」

隆子は敏夫の依頼を承諾し、「とにかく一度お目にかかってみます」ということになった。

後日、本宮は隆子を母親の病室に連れていき紹介した。
「この人が、本苑のトイレ掃除をしていた女性だよ」
と言った。
「あっ、隆子、あんたよう来てくれたなあ。あんたは私の娘やで。私の家に帰ってきてや」
母親は第一声、そう言ったのである。隆子はきょとんとするばかりだった。本宮はびっくりして母親に言った。
「失礼なこと言うなよ。初対面の娘さんをいきなり呼び捨てにしたらあかんやろ」
すると母親は反論した。
「自分の娘を呼び捨てにして何が悪い。この子はうちの娘や」
その様子を見て隆子は二人の間に入った。
「いいですよ。お母さんがそう言ってくださるのなら、隆子でいいですよ」
「この敏夫といっしょになって、私の家に帰ってきてくれるか」
母親は何度も懇願するのであったが、さすがに隆子も、その日に「はい」と承諾することはできなかった。

数日後、敏夫が病院から自宅に戻ると、洗濯物がたたまれ、食事の支度もしてあっ

た。本宮は不思議に思ったが、そこにはかいがいしく働く隆子の姿があった。聞くと、本宮の母親があまりに懇願するものだから、本宮家がどんな家なのか見に来たというのである。

「昨日、家に入ると洗濯物はそのままで、ご飯も炊けてなかったので、今日は仕事の帰りに寄せてもらいました」

隆子は笑顔で答えた。いじらしい隆子の顔を見つめ、本宮は心から感謝した。

それから、隆子は足しげく本宮家に通うようになり、病院の母親も見舞ってくれるようになった。

母親はたいそう喜び、本宮をそっちのけにして、「隆子、隆子」と、本当の娘のように遠慮なく用事を頼むのであった。隆子も自分の母親のように世話をし、はた目には実の母娘（おやこ）に見えるばかりだった。さらには、本宮家にも違和感なく居着いてしまったような状態になった。

ならばと本宮は、母親の言う通りに、婚約すれば、病状が進行している母親も安心して霊界へ旅立ってくれることだろうと思うようになった。

そのことを隆子に頼むと、思わぬ言葉が返ってきた。

「婚約するのなら、結婚してもいいですよ」
本宮は驚いた。本宮自身、長男として母親の入院費用を稼ぐために人一倍働かなければならなかったし、弟妹の面倒もみなくてはならず、実のところ伴侶を迎える余裕はなかった。仮に婚約しても隆子に対して十分なことができず、申し訳ない思いがあった。
しかし、隆子はすべての現状を承知の上で、本宮親子の願いを受け入れたのである。
その年の秋、二人は華燭の典をあげた。そのころから、母親の病状は燃え尽きるロウソクが最後に燃え上がるように、しばらくの間病状が安定し、その後、二人の行く末を見届けるかのように、安らかに天界へ旅立っていった。
大地は、本宮の話を真剣に聞いていた。
「そんなことがあるんですね。で、本宮さんのお母さんはなぜ奥さんの存在を、そんなふうにわかったんですか？」
大地が本宮に尋ねた。
「いや、それが最後までわからなかったんだよ」

「え〜、そうなんですか、不思議な話ですね。でも、奥さんもすごい方ですね」
「そうなんだよ。結婚前後は彼女に対して喜んでもらえることは何にもできなかったから、せめて〝結婚して良かった〟と思ってもらえればと努力してきたんだけど…」
「で、それは果たせたのかな？」
松太郎が訊いた。
「さあ、どうでしょうか？」
本宮は笑いながら答え、それにつられて、松太郎と大地も笑顔になった。
「でもね、この話には、後日談があるんだよ」
本宮の一言に、大地が身を乗り出した。

身魂の夫婦

「さっきも言ったように、母自身も家内の存在については、はっきりとした理由を知らなかったんだと思うんだよ」

「それが驚きですよね。あの～、本宮さんのお母さんは、もともと不思議な力を持った方だったんですか？」

大地が申し訳なさそうに尋ねた。

「いやぁ、そんなことはなかったんだけどね。私の母は、幼い時からとても親孝行な娘だったようなんだ。母の娘時代はまだ、親孝行な子どもを県などが公に表彰するという制度があったらしいんだよ」

「え～、そんな制度があったんですか」

初めて聞く話に大地は驚いた。

「開祖さまが娘時代に、地元福知山藩の藩主から、時の親孝行な娘三人の〝三孝女〟の一人として表彰されたというエピソードが残っているけど、本宮さんのお母さんの時代にもまだあったんだね」

松太郎が感心したような表情で言った。

「そうなんですよ。母は福井県の漁村で生まれ、実家は漁師だったんです。やはり小さい時から奉公に出ていて、一生懸命働いて、蓄えた給金で両親のために漁船を買ったんです。それほど親孝行だったらしいんです。それで、県から当時の親孝行な三人の娘の一人に選ばれて、表彰されたということでした」

「漁船をプレゼントですか！　すごいですね」

大地が驚いたように言った。

「母は小菊という名前だったので、その船には小菊丸という名前がついていました。私も子どものころ、一度だけその小菊丸に乗せてもらったことがありました」

本宮が、懐かしそうに言った。

「とってもステキなお話ですね」

「でもいろいろ苦労したようで、私たちも子どものころは、つましい生活でした」

「そんなお母さんだからこそ、本宮さんの結婚に関しては、不思議な橋渡しをされたんだろうね」

松太郎が言った。

「どうなんでしょうかね」

本宮が答えた。
「あの…、さっき本宮さんの奥さまとの不思議な出会いには、後日談があるとおっしゃっていましたが…」
「そうだったね」
「つまり、奥さまとの出会いの理由がわかったとか？」
「まあ、そういうことだね」
「どんなことだったんですか？」
大地は、さらに身を乗り出した。

「実は、結婚後、三人の子どもたちも大きくなってからだけど、ある日、私一人で亀岡の梅松館に参拝に行ったことがあったんだよ。そしたら、ご神前でお参りした後に、思いもよらず三代さまがお出ましになって、ご面会いただいたんだ」
本宮は言葉をかみしめるように話を続けた。
「三代さまは、『あんたが来るのを待っとったんやで』とおっしゃって、私と家内の身魂の因縁を教えていただいたことがあったんです。実は、その日の朝は、家内とちょっとしたケンカをしていたんだけど、驚いたことに三代さまはそのことをご存じだっ

たんですよ。あれには驚いたなあ」
「奥さまが、三代さまに告げ口されていた、ってことはないですよね」
「とんでもない、そんなことを言えるはずがないよ。私たち二人のことだから、知っておられるわけがないんだけど、三代さまはお見通しだったんだね」
「へぇ〜、すごいですね」
「そのあとに三代さまは、二人の身魂の因縁について、お話になったんだ。一言で言うと、家内の精霊は私の精霊と同じ身魂で、霊界では一柱(はしら)でいたんだとおっしゃったんです」
「え？」
大地はすぐに話が理解できず首をかしげた。
「大地、聖師さまは、天国の夫婦というのは、同じ霊性を持っているから、天国では二人で一人、二柱で一柱と数えられるとお示しになっているんだよ」
松太郎が補足した。
「だから、本宮さんと奥さんで一柱の身魂ということなんですね」
大地が確認した。
「そう、二人でようやく一人前なんだね」

本宮が笑いながら言った。
「それで三代さまは詳しく説明してくださったんです。私も家内も、現界でのご用のために生まれさせられて、その時に、同じ母親から生まれると、現界で一緒になれないから、別のところでほかの母親のお腹を借りて生んでもらって、時が来て私のところに帰ってきて夫婦として一緒になったんだ、と教えてくださいました」

大地は頷きながらも、少し間をおいて質問した。
「それは、本宮さんが奥さまとの出会いのことを三代さまにお話になったから、そのことを詳しく説明されるために、そうおっしゃったということですか？」
大地が首をかしげながら言った。
「いやいや、そうじゃないんだよ、大地君。私は、母が病床で言ったことや家内との出会いのことは一切、三代さまに申し上げたことはなかったんだよ」
「えっ、そうなんですか」
大地はさらに驚いた。
「そうなんだよ。だから三代さまはすごい方なんだよ。そして諭されるように、こうもおっしゃったんだ。

『あなたと奥さんの身魂は、霊界では同じ身魂で、あなたのお母さんと本当の親子なんや。だから、お母さんにとっては、同じ子どもなんや。あなたは兄弟四人いるけど、霊界での本当の親子はあなただけなんやで』

だから、私たちは現界でのご用を全うするために、一つの身魂になってご奉仕しないといけないから、霊界と同じように二人で一つ、夫婦になって神さまのご用にお仕えしないといけない、ということなんだね」

「何だか、びっくりするようなお話ですね」

「そうなんだよね。私も本当にびっくりしたんだよ。でも、三代さまは、さらに続けてお話されたんだ」

「何をですか？」

「それは、人は誰もが勝手に生まれてきたんじゃないってことだよ。神さまは、一人の精霊を立派に育てられるためには、とても長い時間をかけて、お世話をしてくださっているということ。人はこの世に生まれ替わり、死に替わりして、ようやく一人前の精霊に育つんだね。そして、現界では精霊が一つではちゃんとしたご用ができないから、もう一つの精霊を生まれ替わり死に替わりさせて育て上げ、そして同じ身魂につくりあげて、現界で夫婦一体となって神さまのご用にお仕えするということなんだ

よ」

「つまり、霊界で一柱の身魂といわれる夫婦の精霊が、現界で一組の夫婦となってこそ、神さまのご用を全うすることができるということなんだろうかなあ」

松太郎が何度も頷くように言った。

「三代さまは、同じ身魂が夫婦としてこの世で暮らすことが、みろくの世の夫婦の姿だともおっしゃっていたね」

「みろくの世の夫婦……？」

「だから、自分が勝手に生まれてきたように考えたり、亭主は男だから偉い、…なんていうことはたいへんな思い上がりだと、三代さまから教えていただいたんだ。三代さまは、私の因縁生来（いんねんしょうらい）をすべてお見通しだったんです。まさに神さまでしたね」

本宮は、まるで三代さまが目の前にいらっしゃるような雰囲気で語り、三代さまをお慕いする思いが、大地にもひしひしと伝わってきた。大地は、その本宮のおだやかな表情を見て、なぜか自分の心がすがすがしくなっていくような気持ちになっていた。そして、思い出したように言った。

「あっ、そうか。本宮さんのお母さんは最後まで、本宮さんと奥さんとの〝出会いの

謎〟をおっしゃらなかったけど、その答えを三代さまが教えてくださった、ということですね」
「そうなんだよ、大地君。三代さまからのお話をうかがって、死期が近づいていた母は、本人もわからないうちに神さまからのご内流をいただいて、直感的に神さまから言わされていたんじゃないかと、私は思っているんだよ」

「なあ、大地、すごい話だろ」
松太郎が、自分のことでもないのに、ちょっと自慢げに言った。
「じゃあ、今のお話からすると、本宮さんは、あの世に帰られたら、今の奥さまと夫婦になられるんでしょうかね？」
「たぶん…ね。だから今、家内のことは人生の恩人と思っているんだよ」
本宮が真顔で言った。
「なんと、すごいなあ」
「まあ、家内がどう思っているかは知らないけどね」
今度は、笑顔で言った。
「立派な心掛けだなあ」

そう感心する松太郎に、大地が質問した。
「おじいちゃん夫婦はどうなんだろうね？」
「えっ、わしらか？」
松太郎は面食らったように答えた。
「さあなあ、本宮さん夫婦のように、すべての夫婦が、みろくの世の夫婦の姿になっているわけじゃないと思うしなあ。なかには、お互い前世の因縁を背負ってスゴイ修行をしている仮の夫婦もあるらしいから、うちの場合はどうなんだろうなあ？」
「梅木さんご夫妻も、きっとみろくの世の夫婦じゃないですか」
「いやいや、どうだろう？　大地、またおばあちゃんに訊いといてくれ」
「あ、おじいちゃん、うまくごまかしたね」
三人は顔を見合わせて笑った。

「おやおや、楽しそうですね」
ともが、おかずを持って入ってきた。
「おばあちゃん、おじいちゃんとは、みろくの世の夫婦になっていますか？」
「えっ、何のことだい？　大地」

「あ、いや、またゆっくり訊くね」
ともは、怪訝（けげん）な顔をした。

決　意

みろく大祭当夜の梅木家の夕餉は、本宮夫妻の不思議な因縁話で盛り上がった。途中から、ともと京子も加わり、あっという間に時間がたっていった。

「いや〜、すっかりごちそうになりました。長いことお邪魔してしもうて、そろそろ失礼します」

本宮が腕時計に目をやりながら言った。

「こちらこそ、お引き留めして悪かったですね。でも、おかげで楽しい時間を過ごせましたよ」

松太郎が頭を下げながら言った。

「不思議なお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございました」

大地がお礼を言った。

「いや、こちらこそ楽しかったよ。ところで、大地君たちは、いつまでこちらにいるの？」

椅子から立ち上がりながら、本宮が訊いた。

「明後日から仕事なので、明日中には長野に帰らないといけないんです」

大地が答えた。

「明日六日がゴールデンウイークの最終日で、高速道路も混むでしょうから、あわてずゆっくり帰ります」
京子が言った。
「そうですか、どうぞお気をつけて。また、夏の瑞生大祭か、秋の大本開祖大祭でお会いできたらいいですね」
本宮が笑顔で言った。

翌朝もさわやかな五月晴れとなった。
今回、京子と大地は車での帰省だったため、ともは孫のためにとたくさんの土産を用意した。野菜や雑貨など、手近にあったいろいろな品物を大きめの段ボール箱に詰めて大地に持たせた。大地はその荷物を車のトランクに積み込んだ。
午前九時過ぎ、京子と大地は、松太郎夫妻に見送られ、綾部をたった。
案の定、東名高速道路は渋滞になっていたが、中央自動車道ではいくぶん解消し、さらに長野自動車に入ると車はスムーズに流れていて、夕方には長野の自宅に帰り着いた。

「ただいま〜！」
「おかえりなさ〜い」
京子と大地の声に、奥から返事があった。大地の弟、司（つかさ）の声だった。
「長い間、ありがとうございました」
リビングに入り、京子が夫・剛（たけし）に声をかけた。
「おかえり。お父さんとお母さんはお元気だったかい？」
「ええ、すこぶる元気よ」
「そりゃあ、何よりだったね」
剛が笑顔になった。
「そうそう、司、おばあちゃんからいっぱいお土産もらってきたからね」
京子が司に向かって言った。
「お〜、ありがとう」
「司、これだよ」
大地が段ボール箱を司の前に置いた。司はそれをうれしそうな様子で開けた。
「司、今日はバイトはなかったの？」
大地が訊いた。

「あったよ。今日は早出だったから、さっき帰ってきたところだよ」
「そっか、お疲れさん。ゴールデンウイークは司が行っているコンビニも忙しかっただろ？」
「まあね。普段よりは、観光客が少し多かったってとこかな」
司は今年大学の三年生。来年の就職活動に向けて、少しずつ準備をしながら、アルバイトにも精を出している。
その夜は、家族四人、ひさしぶりにそろって夕食のテーブルを囲んだ。

「ちあきは、今年のゴールデンウイークも帰省できなかったね」
大地が妹のちあきの話題を出した。
「連休中はお店が忙しいから、仕方ないわよね」
京子が答えた。
雨宮家には、もう一人、大地の三歳下の妹がいる。司の姉である。ちあきは三年前に美容の専門学校を出て、今は東京で美容師になるための修行中である。
「まだアシスタントだから、一人前になるためには、相当努力しないとダメみたいよ。なかなか厳しいようね」

京子が言葉を継いだ。
「一度店を替わっているからなあ」
剛が思い出したように言った。
「最初に就職して一年くらいたってからだっけ？」
大地が訊いた。
「いや、半年ぐらいだったわよ。最初のお店は、東京駅に近いオフィス街にあって、条件的には良かったんだけど、〝ここでは自分の目指す技術は身につけられない〟って、きっぱり見切って辞めたのよね。話を聞いたときはびっくりして心配したけど、今考えると良かったわね」
「あの娘は、やるとなったら突き進むタイプだからなあ。今のお店も、自分で探し回って、〝ここ〟と決めたお店に飛び込み、何回も頼み込んで、やっと採用してもらったんだったなあ」
剛が言った。
「表参道の美容室激戦区の人気店に、ツテやコネなしで入ったんでしょ。お姉ちゃん、やるよね」
司が言った。

大地は、ちあきのことを聞きながら、知っていることとはいえ、あらためて妹の決断力と果敢な行動力に対して、うらやましく思った。

〝自分は今のままでいいのか？〟……そう思う大地だった。

平成二十七年、夏。ＪＲ中央本線を走る特急「しなの」の車窓からは、木曽八景の一つ〝寝覚めの床〟が一望できた。巨大な花こう岩が木曽川の激流に刻まれてできた自然の彫刻といわれる景勝地だ。走り過ぎる景色を漠然と見ながら、大地は少し不安な面持ちでいた。

大地は、京都府亀岡市の天恩郷に向かっていた。五年前の冬、初めての節分大祭に参拝した帰りには、車窓から雪におおわれたこの景色を見たことを思い出した。

……あの時は就職先が見つからず焦っていた時だったなあ。

その時手にしていたのが、松太郎から手渡された『生きがいの探求』（文庫版）だった。そして、ちょうどこの辺りで読んだ一節に心が救われたことを思い出した。

淋しいでしょう　辛いでしょう

しかし辛棒してください
もう少しです
明けぬ闇はなく
尽きぬ冬はありません
歯を食いしばってでも
土にかじりついてでも
どうなりこうなりこの峠を越えてください
〝ああだめだ〟などとはけっして言わぬことです
東でゆきづまったら西へまわりなさい
南がふさがったら北へお逃げなさい
東西南北みなだめでしたら
しばらくそこで臥(ね)ていてください
天地は毎日かわる……

大地が大好きなお示しである。いつもかばんに入れている『生きがいの探求』を取り出し、ページをめくった。

当時の気持ちがよみがえり、今の心境と重なるような思いだった。

大地は昨年、せっかく就職し順調に仕事もこなしていた「よしだ工房」を依願退職していた。仕事に対しての不満があったわけではなかったが、〝自分がしたいことは本当にこの仕事なのか〟と自問していた。その思いが次第に強くなり、悩んだ末、〝あること〟をきっかけに一つの結論に達した。

その〝あること〟とは、大本長野主会で開催された「少年夏期学級」だった。

大地はそれまで、長野主会青年部に関わりをもっていたわけではなかったが、京子の友人である小布施支部の町村恵子を通じて、夏期学級の手伝いを頼まれた。

最初は躊躇（ちゅうちょ）していたが、京子の積極的な勧めもあり、仕方なく手伝うことにした。うまい具合、会社の夏休みもとることができ、開催のための準備から関わった。

その集まりの中で大地は、少ない人数で一生懸命に取り組む長野主会の青年らの姿に接し、〝自分も彼らの役に立ちたい〟という思いがわいてきたのだった。

夏期学級は、わずか一泊二日の開催だったが、参加した子供たちの世話をしながら、子供と接することの楽しさを味わった。もともと大地は子供好きだったが、忘れかけ

ていた気持ちに火が着いたような思いだった。

……子供に関わる仕事がしたい！

その気持ちが大地を突き動かした。そしてその年の暮れ、会社を辞めることを決意したのだった。

話を切り出した時、社長からは慰留されたが、大地が自分の〝決意〟を伝えると理解してくれ、快く承諾してくれた。

その大地の〝決意〟は、「中学校の教師になる」という道だった。

大学時代、幸いにも大地は教員免許だけはとっていた。これが役に立つことになった。あとは採用試験である。

大地は今年に入り、レタス収穫のアルバイトをしながら、採用試験受験のため、学生時代以上に猛勉強した。

そして七月中旬、長野県の公立学校教員採用試験の一次選考を受けた。終わって翌週は、昨年同様、長野主会の夏期学級に顔を出した。

それは自分の〝決意〟が正しかったかどうか確かめる意味でも、貴重な時間となった。そして、自分が選択した道が間違っていなかったことを再確認できたのだった。

さらに、夏期学級には本部から高村浩一特派が指導に来ていて、夏期学級が終わって高村から聞いた〝祈り〟についてのおかげ話が、大地の心に深く刻まれたのだった。

取り込み詐欺

大地は特急「しなの」の車窓から走り行く景色を眺めながら、数日前、高村特派から聞いた体験談を思い出していた。

その話は、高村が別の教区の特派を担当していた時のことで、六十歳代の女性信徒・Sさんから身の上相談を受けたことに始まった。

「Sさんは、その時初めてお会いしたご婦人で、呉服の行商をしておられました」

「呉服の行商？」

大地が首をかしげた。

「だいぶ以前の話だから、今もそうした商売の仕方があるのかどうかわからないけど、呉服屋さんから五反（たん）とか十反とか、まとめて反物を預かって、個人の家を一軒ずつ訪問する商いなんだよ」

「そういう商売があったんですね」

「二十歳になる娘さんがいる家だったら、振り袖用の反物を勧めたり、訪問した先で、〝あそこの娘さんに縁談があるようだ〟という噂（うわさ）を耳にしたら、花嫁さん用の反物を持

って、訪ねたりしておられる方だったんだね」
高村が説明した。
「地元に密着した商売のようですね」
「そうだね、コミュニケーションが大切な商売といえるだろうね。ところがある日、その方が〝取り込み詐欺〟の被害にあってしまわれたんだ」
「〝取り込み詐欺〟？」
「この商売も信用第一だから、ふだんは、馴染(なじ)みの方の紹介があって、訪問先を決めておられたんだけど、ある時、たまたま初めての家を訪ねられたんだ」
「新規開拓ですね」
「そう。新規の家を訪ねて、結婚間近のお嬢さんはいらっしゃいますか？　と尋ねたそうだ。すると、実は娘には結婚したいという相手がいて、今、話が進んでいます、という返事だったんだね。それでSさんは、よかったら一度お嬢さん用の反物をご覧いただけませんか？　と勧められた。するとその相手は、娘が勤めから帰ってきたら見せて、もし気に入ったのがあればお世話になりますので、その反物を預からせてもらっていいですか？　ということになったんだね」
「なるほど」

「新規のお客さんだったけども、その時は馴染み客同様に信用して、二、三日してからまた伺いますので、と反物を五本預けて帰られたんだ」
大地は頷きながら高村の説明を聞いていた。

「Sさんは数日後、約束通りまたその家を訪ねられた。すると、反物を預けたご婦人が玄関に出てきて、〝どなたですか？〟だって」
「えぇ～！」
「最初は冗談かと思って、いや、先日お嬢さんのための着物の見本にと反物をお貸ししましたけども…、と説明したら、そんな物は知りません、とシラを切られたというんだよ」
「え～、ひどい話だなあ！」
「まったくね～。それで〝渡した〟、〝預かってない〟、と押し問答になったけど、らちが明かないので、とりあえずその家を出たそうなんだ。でも、何とかしたくて警察へ行かれたんだね」
「警察に訴えたんですね。で…？」
大地が興味深げに訊いた。

「ところが警察では、反物を渡したという証拠がありますか？　と訊かれた。でも、何もないわけでしょ。自分は何十年もこの商いをしてきて、信用商売だから、預かり証なんかは今までもらったことはありません。だからその人にももらってないんです、と説明したわけ。すると警察では、証拠がないなら、警察としては動けないですね、と取り合ってもらえなかったんだね」

「確かに、そうなりますよね」

「でもSさんは悔しくて、何とか反物を取り返したくて、今度は知り合いを通じて、弁護士に相談されたんだよ」

「反物五本といったら相当高価でしょうからね…」

「そうだね。でも残念ながら、弁護士も警察と同じ対応で、受けてもらえなかったそうなんだよ」

「やっぱり」

大地は頷いた。

「そんな時に、私がその近くの支部に行ったものだから、身の上相談にお見えになったというわけなんだ」

「でも、それは難問ですね」
「そうなんだよ。いろいろ経緯をうかがってから、どうしたらいいんでしょうか？と訊かれたわけだけど、私もまだ若かったし、具体的にどうすればいいのか、即答できなかったんだよ」
「警察もダメ、弁護士もダメとなると、素人ではどうにもなりませんよね」
「大地君、そうなんだよ。それに、詳しく状況を訊くと、とても気の毒なことでね」
「というと？」
「Sさんはご主人を早くに亡くされて、呉服の行商をしながら女手一つで子供さんを育ててこられた苦労人だった」
「子供さんは何人ですか？」
「男のお子さんが二人。その当時は、上が大学生で下が高校生ということだったね」
「苦しい生活だったんでしょうね」
「そんな様子だったね。詐欺事件の後は、警察に行ったり、弁護士を訪ねたりしながらも、何回も相手の家に掛け合いに行かれたそうなんだよ」
「そうなんですか」
「するとね、相手の家を訪ねた何度目かの時、そこの息子がちょうど帰宅してきたこ

とがあったんだけど、その息子は高級外車に乗って帰ってきたというんだよ」
「え〜、じゃあ、その家が貧しい家庭だということでもなかったんですね。腹立つなあ〜！」
「そうなんだよ。Sさんもそれを見て、はらわたが煮えくりかえったそうだ。〝自分は生活を切り詰め、いつもつつましくしてきたのに、人の物を盗っている家の息子は、高級外車を乗り回すような裕福な生活をしているなんて、こんな不条理なことがまかり通るのか〟と思ったそうだ」
「そりゃあ、そうですよね」
大地はあきれた表情になった。
「Sさんも、その事件以来、一生懸命に神さまにお願いしておられたようで、こうおっしゃったんだ。〝先生もお祈りしていただいて、あんな人間は懲らしめてやってください〟と」
高村は苦笑いしながら言った。
「いや、気持ちはわかるなあ〜！　で、先生は何と答えられたのですか？」
大地が尋ねた。

「申し訳ないけど、私には、誰かを懲らしめてください、というようなお祈りはできませんとお答えしたんだ」
「それで……？」
「まず、決して冷たい対応だと思わないでください、と前置きしてから……。人を恨んで、神さまに何とか罰を与えてやってくださいということが、本当に正しい祈り方かと考えると、私はそうじゃないと思います。詐欺という罪は悪いことだけども、その人を恨んだり呪ったり、地獄へ落ちてしまえと願ったり、ましてや神さまに罰を当ててくださいと祈る想念は、悪い人が持っている想念と同じ世界、霊界です。だから、そうした思いを持ち続けることは、結局、悪の世界、偽りの世界に自分自身を落としてしまうことになります。それだけはしてはいけません」
「……」
大地は無言で頷いた。
「では、神さまにどうお祈りしたらいいのかということですが、人の物を盗って平然としている相手の罪をどうぞ許してやってください、とお祈りすることです。相手の女性は、神さまのご存在を知らないから平気で悪いことをしてしまうのであって、〝神さま〟ということが分かれば悪いことはしなくなるはずですから、一日も早く改心して、

自分の罪に気づくような人間に導いてあげてください、と相手を哀れむ気持ちでお祈りしていただくしか解決の方法はないと思います……とね」
「ん〜、先生、それはとても難しいことですね」
「そうだな。やはりSさんも私の答えを聞いて立腹されたね」
「ですよね」
「Sさんは、先生がどんな立派な人か知りませんけど、私の立場に立ったらそんなことで納得できますか？　盗られた人間が盗った人間のことを、どうぞ救ってやってくださいなんて、祈れるわけがないじゃないですか、とね」
「普通の感情ですね」
「もちろん今はそうでしょう。でも、最後は、〝愛〟でしか、物事は善くなることはないのですよ。〝まごころ〟が神さまに通じます。〝悪〟は神さまには通じません。神さまは〝まごころ〟のある愛の祈りをお受けになるんです。相手は神さまに祈るということ、お詫(わ)びをするということを知らない。ならば道理を知っている者が、その人間に代わってお詫びをするということが大事なのです。開祖さまが人類に代わって捧(ささ)げられた祈りが、まさにそうした愛善の祈りだったんですよ…と」
「ん……。それで先生、その方は最終的には納得されたのですか？」

「もちろん、はいそうですか、とすんなり納得はされませんでした。私は、ダマされたと思って、形からでも、とにかく一週間お祈りしてみてください。私もいっしょにご祈願させていただきます、とお願いしました」

「何だかすごい話ですね。それでどうなったんですか?」

「それから一週間、私もお祈りをしつつ、教区内を巡回していました。すると一週間過ぎた時に、巡回先の主会長さん宅気付で私宛に、Sさんからお手紙が届いていたんだよ」

「何て書いてあったんですか?」

大地は、目を輝かせた。

尊い祈り

「本部に私の巡回先を問い合わせて投函されたのだろうけど、手紙をもらうとは思ってもいないことだったので、ドキドキしながら開封したんだよ。細かいことまでは憶えていないけど、とても印象的な内容だったよ」

「……」

大地は無言で身を乗り出した。

「概ね、こんなことだったよ。

……先生から無茶ともいえるお祈りをしなさいと言われて、最初とてもお祈りする気になれませんでした。でも特派の先生に言われたことだから仕方ないと思って、嫌々お祈りを始めました。やっぱり三、四日間くらいは、本当に嫌な思いでした」

「それでもお祈りされたんですね」

「……ところが五日目くらいになってきたら、だんだんと先生が言われるように、取り込み詐欺をした相手がかわいそうに思えてきました。〝人の物を盗るとは哀れな人なんだなあ〟と、不思議とそういう気持ちになってきました。それから少しずつ神さまに、〝どうぞ許してあげてください〟とその人に代わってお詫びをすることができるように

なりました……、ということだったんだね」

「すごいですね」

「Sさんは、反物を盗られたという悔しさや執着心がなかなかとれなかったんだろうね。ところがしばらく続けておられたら、〝盗られたものは仕方がない〟と、だんだんとあきらめの気持ちにもなり、執着心が薄らいできたんだろうね。それと同時に、相手に対し、〝かわいそうな人なんだ〟という気持ちが湧いてきた。でも、そうなるまでに五日くらいかかったということなんだね」

「五日間で、よくそんな思いになられましたね」

「そうだね。立派だよね」

高村は、小さく頷きながら話を続けた。

「……そして一週間目には、〝本当に心からその女性に代わって神さまにお詫びをする気持ちになりました〟…、と書いてあったんだよ」

「たいへんな気持ちの変化ですね」

大地は、深く頷きながら言った。

「そして、そんな気持ちの変化があった日の朝、不思議なことが起きたんだ」
「えっ、どんな？」
大地は、いっそう目を輝かせた。
「お手紙には、こう書いてあったんだ」
高村は少し間を置いて、手紙の内容を大地に語った。

「……今朝、ごめんください、と誰かが訪ねてきました。誰だろうと思って玄関に出てみると、なんと取り込み詐欺をした女性が立っていました。彼女が例の反物を持ってお詫びに来られたのです…とね」
「えぇ～、そうなんですか」
「たいへん申し訳ないことをしました。つい出来心で悪いことをしてしまい後悔しましたが、お返しする勇気も出なかったんです。でも、今朝、これはどうしてもお返ししないといけないという気持ちになりました。お返ししたら済む問題でもないですし、お叱りを受けても仕方ありませんが、とにかくお返しします…と、謝罪し、反物を返してくれた、ということだったんだね」
「それは、すごいお話ですね。聞いていて鳥肌が立ちました」

大地が右手で左腕をさすりながら言った。

「……先生から一週間お祈りをしてください、私も一週間お祈りをしますから、という言葉をいただいてお別れして、ちょうど一週間目。こんな形で反物が返ってくるなんて思ってもいませんでした。相手が申し訳ないという気持ちになってお詫びに来るとは想像もできないことでしたが、先生がおっしゃったことが本当だったんだなあと、初めて気づかされました。大変ありがとうございました…、という丁寧なお手紙だったんだよ」

「いや〜、そんなことがあるんですね。びっくりしました。まごころからのお祈りが通じた奇跡的なお話ですね」

乗り出していた身を元にもどしながら、大地は驚いた表情で言った。

「そう、私自身、そんな結末になることを想像していたわけじゃないし、一週間という期間に確信があって言ったわけでもなかったんだけど、ちょうど一週間で結果をいただいたことには、私も驚いたね」

「え、何か根拠があって一週間っておっしゃったんじゃなかったんですか？」

大地は不思議そうな顔をして質問した。

高村は、何かを思い出したかのような表情で、そのわけを話し始めた。
「ある時、三代さまにご面会いただいた折に、三代さまから、お祈りについてのお話をうかがったことがあったんだ。その時三代さまは、『神さまに何かお願いをするときには、やっぱり一週間はお祈りをせんとあかんでな』とおっしゃったんだよ。そのことが、Sさんの相談を受けている時に、ふと頭に浮かんだもので、一週間という期限を伝えたんだけどね。あれはきっと神さまに言わされたんだろうね」
「そうだったんですか？」
「でも本当に不思議だったね。ご祈願を一週間続けて、その朝に、Sさんの心の中から恨みや執着心がすっかり消えて相手を哀れみ、許す気持ちになられ、まごころからのお祈りができるようになったと言われた。そして、相手もその朝に、Sさんにお詫びをして反物をお返ししないといけない、と改心された」
「そうですね」
「私も、このSさんの出来事を通じて、誰であれ相手を恨んだり、呪ったりするということは、本当にいけないことなんだなあ、ということをあらためて教えていただいたし、この出来事はとても感動的な体験として鮮明に憶えているんだよ」

高村はその当時の場面を思い出すように、言葉をかみしめながら言った。

大地は真剣な表情で、高村の体験談に聞き入っていたが、気がついたように高村の方を見た。

「ところでSさんは反物を返してもらってから、どうされたんですか?」

大地が、興味深げに訊いた。

「手紙の内容はそこまでだったから、その後のことは定かではないんだ。でも、その手紙の様子から、きっとSさんは、相手の女性に〝もう二度とこんなことはしないでくださいね〟と言って許されたんじゃないかなあ。そして、きっと神さまから大きなおかげをいただいたことを実感されたんだと思うよ」

「そうですよね、自分の思いがこんなにも変わるものかと思われたでしょうし、それにつれて相手の気持ちも変わったということを実体験されたんですからね」

大地は言葉を確かめるように話した。

「そうだね、正しい祈りをしていれば、それによって自分の心が変わり、自分が変われば相手も変わり、世界も変わることを体験されたと思うね」

「とっても感動的なお話ですけど、なかなか難しいことですよね。人を恨んだり、呪ったりするというのは良くないことだということは、頭では理解できます。それでも社会に出て、職場や人間関係の中で、ささいな妬(ねた)み恨みというのは、少なからず誰でもあると思うんです」

大地が訊いた。

「そうだね。この現界に生き、仕事をして生活していく上では、ままあることだね。でもそうした思いは神さまから見たら天国的な想念じゃないんだよ。どちらかというと地獄的な想念じゃないかな。それを改心していくことが、身魂磨きなんだろうなあ」

「身魂磨き…かあ」

大地は、高村から聞いた話を回想しながら、その言葉を小声で口にしていた。しゃべった後にあわてて周囲を見回したが、幸い近くに乗客はなく、独り言を気づかれることはなかったろうと、安心した。

大地が乗った特急「しなの」は、多治見を過ぎていた。

大地は手にしていた『生きがいの探求』を無造作に開いた。

真にたまらないと思わぬ人に祈りはない。　祈れば光が射してくる
今まで見えなかった道が見え出してくる
その道をお進みなさい
進むのはあなたの足で
また行きづまったら　またお祈りなさい
祈れば光が射してくる

この一節を読み、顔を上げて目を閉じた。
「Sさんには、まさに光が射してきたんだろうなあ」
心の中でつぶやいた。
「自分にもきっと光が射してくるはずだ」
そう自分に言い聞かせると、不思議と穏やかな気持ちになった。
明日からの聖地での五日間、大地にはどんな出会いや出来事が待っているのだろうか。

（続く）

「暁の大地」第3巻　おわり